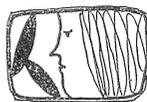


人物を中心とした

文化郷土史

—北海道—

大西泰久



— 光りは北方から

北海道は明治二年（一八六九）に開拓使が設置され、それまで蝦夷地と呼んでいたのを「北海道」と名称を変え、新しい開拓のくわが大地に下されたのである。

昭和四十三年（一九六八）は開道百年ということで、百年行事も種々行われたばかりであり、百年という短時日になした開拓は世界にもあまり類例をみないと言われている。

他の府県のように土着した歴史は少ないかも知れないが、蝦夷地と称されていた頃からの歴史を考えれば、部分的には松前のように長い歴史を持ち、先人の偉業は郷土の文化を育てあげて来たのである。光りは北方からVの言葉のように、北海道は今や日本の大地として国の期待を一身に背負った光り輝ける地域であるといっても過言ではあるまい。

開拓使の設置と共に、佐賀藩主鍋島直正が開拓督務に任ぜられたが、その際の勅書は、

「蝦夷開拓ハ皇威隆替ノ関スル所、一日モ忽ニ不可ラス、汝直正深ク国家ノ重ヲ荷ヒ、身ヲ以テ之ニ任センコトヲ請フ……（後略）」

とあって、明治天皇が蝦夷地に対して重大な関心を示していることが一目瞭然である。

当時としては、蝦夷地開拓の事は箱館戦争のような苦しい経験と、それと共に当時増大しつつあったロシアの南下政策に対する現実的な危機感に対処していくために、国土の維持及び防衛策として

蝦夷地開拓が重要な課題として浮かびあがって来たのである。

このような情勢下にあつて、認識の視野の中に光りを当てられたと言えばそれまでの事であるが、しかし北海道のスタートはそれだけの分野に大きな人脈を育て、それらの人脈が生み出した文化遺産は前述のように、歴史の中に郷土の文化を育成して来たのである。

明治四年（一八七一）一月、開拓次官黒田清隆は外人技師を招くためにアメリカに渡り時の大統領グラントの推せんによつて、農務局長ホールレス・ケプロンを招へいする事が出来た。ケプロンが来日したのはその年の七月である。それから明治八年（一八七五）五月まで滞在し、その間二つの報文——いわゆる「ケプロン報文」と多くの答申を行った。

また開拓使は人材養成のために、明治五年（一八七二）三月、東京芝罘上寺内に開拓使仮学校を設置、八年七月には札幌に移して札幌学校を改称し、翌年には札幌農学校となったのである。

札幌農学校には、アメリカのマサチューセッツ州立農科大学長のウイリアム・S・クラークを教頭として迎えた。

クラークは聖書を教育の基本として異色ある教育を実践したのである。

任を終えて帰国する際の訣別の辞、「ボーイズ・ビー・アンビシヤス」はあまりにも有名である。

クラークの教えは「イエスを信ずる者の誓約」となり、わが国でのキリスト教プロテスタント三大源流の一つ、「札幌バンド」の発祥となったのは「光りは北方から」を示唆するものであったといえよう。

このクラーク山脈からは偉大な人物が世に躍り出た。「ヤソ教を追い払え」と力んだ内村鑑三も、やがてはクラークの影響を強く受け、キリスト者内村鑑三になってしまった。

内村の影響を受けた人たち——有島武郎、志賀直哉、矢内原忠雄、南原繁などもクラークが来なければ別の形で世に出たかも知れない。

内村、有島など生まれは北海道ではないが北海道を土壌として成長した人間といえよう。同じく北海道の土壌の中に成長した札幌農学校の一期生、北大総長の佐藤昌介、音韻学の大島正徳、水田開発の功労者内田濤、二期生の内村鑑三、新渡戸稲造、植物学の宮部金吾、牧場を用いた町村金弥などその名をあげれば際限がない。

町村金弥の牧場で生まれたのが町村敬貴。町村牧場の当主で、かつて貴族院、参議院にも、その席があったが、牛に勝るものはないと考えたのか、それ以来政治に関係あるものには興味を示さなかった。敬貴の実弟が前北海道知事で現参議院議員の町村金五。兄は牧場で北海道を開き、弟は政治の力で北海道を開拓したというわけである。

牧場の事にふれたから、ついでに書かなければならないのは宇都宮牧場。当主は宇都宮勲でやはり牧場の生まれ。

北海道といえば牧場——観光客からみれば至ってロマンチックに聞こえるが、現在に至るまでは並大抵の努力ではなかった。

北海道をデンマークという夢を描いて奮闘した黒沢西蔵。雪印乳業の創始者であり、酪農学園大学の基を作った。酪農に生涯をかけたキリスト者である。

二 学問の世界

明治初年における北海道の開発が、ケプソンの報文に示されるように、多分にアメリカ的方法のみによってなされたかのように考えられるが、それを日本化するために裏側から粘り強くバックアップしたのが榎本武揚だと言われている。

しかし世人は榎本武揚といえば単に五稜郭戦争と榎本武揚を考えしてしまう。科学者として、また豊かな文化人としては考えない。

そればかりではない。駐露全権大使として活躍した外交官榎本武揚を忘れていたのである。榎本は道産子ではないが北海道人にとっては道産子のような親密感がある。

やはり彼のほんとうの人生は五稜郭に立てこもった時点からスタートしたと考えても過言ではなからう。

科学者榎本武揚について学問の世界での人脈地図をあげてみよう。



榎本武揚

推計学を日本に紹介した二人の推計学者、東京理科大の増山元三郎、九大の北川敏男。増山は「榎本抽出による推計理論の発展と応用」で朝日賞（昭和二十二年度）を与えられた。

現在では産業界のみならず、あらゆる分野に必要とされる推計学も当初は随分



知里真志保

られたアイヌの言語学者知里真志保がいる。

明治四十二年（一九〇九）二月二十四日幌別町字登別に生まれ、昭和三十六年六月九日五十二歳の生涯を札幌の斗南病院で終えた。

札幌の藻岩山の中腹に建

立された墓碑の背面にはユーカラの一節が刻まれている。

銀のしずく降れ降れまわりに
金のしずく降れ降れまわりに

これは彼の親友であり、またアイヌ語地名の研究で知られる山田秀三（北海道曹達社長）の書によって刻まれたものである。

生前日本常民文化研究所より出版された「分類アイヌ語辞典」三巻はアイヌ語の本格的な研究として朝日文化賞を得た。昭和三十年、四十六歳の時である。その他数多くの研究を世に問うたのに、五十二歳の生涯は余りにも早すぎたと、死を惜しむ声は今だに絶えない。今「知里真志保著作集（全四巻）」が刊行中である。

知里真志保の姉、知里幸恵はアイヌの天才少女と言われたが、大正十一年（一九二二）十九歳でこの世を去った。

幸恵が書き残したノートは、死後約一年程してアイヌ文学の名作「アイヌ神謡集」として出版され話題をまいた。

十九歳の一少女の本として、幸恵の名は世間に知れわたったと伝えられている。

不遇であったという。

初代の国立世論調査所長で立教大名誉教授小山栄三も、増山、北川と同様、港町小樽の出身である。

統計に関係深い三人が三人とも小樽出身とは誠に奇な事である。北海道といえは雪。雪といえは文句なしに中谷宇吉郎である。もうこの世にはいないが北大に三十二年間も勤めたから、石川県出身の中谷の体には北海道人の生活感情が身にしみこんでいる筈。言うなれば石川県の北海道人か。中谷の人生は雪との人生であったわけ

で、北海道生まれと同じようなものと考えたくなるのは致し方のない事である。

北大に関係ある科学の世界をみれば、前出の植物学者の宮部金吾。そして現在では地質学の泰正雄は忘れてはならない。

また触媒の世界的権威堀内寿郎は札幌生まれの日本学士院恩賜賞受賞者、かつて昭和二十九年に北大のポルト部を見事に優勝させたが、ポルトの監督としてまたポルトの力学を徹底的に研究してポルトの設計に没頭し彼独特の漕艇法を考え出した事で名をはせた学者でもある。そしてまた北大学長の位置にもあった人物。

中谷が開拓した寒地の科学には、釧路出身の海水学者楠宏、声別出身で低温医学の根井外喜男の存在も異色であろう。

医学が出たついでに、医学の分野をみれば多士済済であるが、北大医学部生え抜きの病理学名誉教授の武田勝男は札幌出身。それに公衆衛生学の安倍三史も重要な存在に北大名誉教授で北海道立衛生研究所長。また井上善十郎も同様忘れられない人物である。

北大の名が書かれば書かねばならない人物には、天下にその名を知

真志保も幸恵も、金田一京助博士の世話になったが、学問上の事では真志保も恩師金田一京助と対立した事もあったという。

知里姉弟の二人にふれたら、忘れられないのは真志保のおば金成マツである。

知里真志保が敬愛してやまなかったおばであったが、彼がこの世を去るふた月程前に、すでにこの世を去っていた。

知里の死後、政府は従五位勲六等瑞光旭日章を贈り、翌日には正五位に上げられたという事であるが、金成マツもユーカラ伝承者として無形文化財に指定され、また紫綬褒章を贈られているが、知里真志保、そして金田一京助のアイヌ学研究に対しての最大の協力者が金成マツであった。

彼女がローマ字で綴ったユーカラのノートはぼう大な冊数に達するという。一部は「アイヌ叙事詩ユーカラ集」（三省堂刊・金田一訳注）の一―七巻として出版されている。

世界に誇る偉大な叙事詩、ユーカラをとりあげたから、ここで郷土の歴史をこつこつとまとめ、その上多くの後継者を育てた河野常吉は北海道史研究家としては斯界の日本的な権威であった。また人類学、考古学にもその才能を表した。常吉翁の息、河野広道。広道の息、河野本道。親子三代にわたって人類学、考古学の研究にたずさわっているのも珍しい。

常吉翁は本当の意味の地方史といわれている「函館区史」の編者であり、その他数多くの著書、編著書が残されている。河野広道の著作集全四巻（北海道出版企画センター刊）も世に問われた。

知里真志保、河野広道と共にとおとされないので詩人、郷土史家の

史料源蔵である。

明治三十七年（一九〇四）弟子屈町に生まれ、獣医学校中退の後、代用教員、牛飼などを経験し、その間北方の詩を発表し、アイヌ研究などに没頭、現在数多くの著書がある。「北海道の旅」「アイヌ伝説集」「コタン生物記」「アイヌ文学の生活誌」「アイヌの四季」など、どれも北海道という郷土に深く根を下したもので、真の意味の人文郷土史の種を蒔き続ける人物である。北海道文学館理事長として、その建設に努力している。

北海道の郷土文化を代表する一人である。

北海道史研究の大御所に北海学園大学長の高倉新一郎がいる。北大名誉教授、北海道史総編集長など役職は多数。十勝地方の開発功労者高倉安次郎の長男として明治三十五年（一九〇二）十一月帯広で生まれ、農業経済が専門だが、北海道史研究の第一人者。

「アイヌ政策史」「北海道拓殖史」「蝦夷地」「北海道小史」などたぐさんの著書がある。北海道史といえば忘れられない人に奥山亮がいた。最近惜しくも他界したが、北海道地方史研究会を主宰し、機関誌「北海道地方史研究」は高く評価され、昭和二十六年七月奥山亮によって創刊されて以来、今年の四月九十号が終刊となった。今また同氏の病没のあとあらたに有志によって「北海道史研究会」が結成され機関誌の発刊がされようとしている。「新考北海道史」「北海道史概説」「アイヌ衰亡史」など貴重な著書である。

同じく北海道の郷土の歴史の研究に日夜努力を重ねている者も多く、渡辺茂、榎森進、小池喜孝、藤本英夫、供野外吉、越崎宗一、そして「一之ぞキリシクン」（講談社刊）の永田富智などがある。北

米村が土器と石器に魅せられている一方、森の王者クマに魅せられてクマ学者と呼ばれている。犬飼哲夫。生まれは長野県だが、北大にあこがれてそれ以来ずっと住みつく。

北大名誉教授で現在は北海道開拓記念館長、札幌市教育委員長の要職にある。「わが動物記」（暮しの手帖社刊）は今なお中・高校生の間広く読まれている名著である。

犬飼哲夫と似た男に植物の館脇操。北海道の原生林に魅せられて北大へ入り、宮部金吾を師とし、それ以来五十年北海道の樹木と暮らしている。植物社会学というのが専門。

宮部金吾の弟子にもう一人記さなければならぬ人に、植物病理学者の平塚直秀、斜陽の炭坑町夕張の生まれで寄生菌の研究につきし学士院賞を受けた。

炭坑といえは幾春別の生まれのガン学者黒川利雄は現代人にとっては絶対に銘記すべき存在。胃ガンとか肺ガンとか最近随分ガンのついで病気が多いからである。

井尻正二、小樽生まれの古生物学者。前出の北大の湊正雄との共著『地球の歴史』とか『日本列島』などで一般人にもよく知られている。先祖はむかし石狩の漁場で成功したという。井尻の祖母は当別に入地した伊達藩の伊達邦直の次女である。まさしく北海道人の血が濃いというべきかも知れない。著書も多く、殊に十勝の忠類で完全なナウマン象の化石が発掘されて以来、化石に関する興味は一般の間にも広がり、この方面の著作も多い。井尻正二が伊達藩と関係深い人といえ、もう一人伊達藩に関係深い人がいた。文化人類学者の泉靖一で道産子ではないが、北海道へ渡った伊達藩の武士の

海道の秘境といわれている知床半島の羅臼であって、知床のおやじと親しまれ、この地方のあゆみをこつこつと記録している村田吾一は異色の存在。「雲流る国後」「知床花ごよみ」「知床のすがた」がある。

高倉新一郎が十勝開発功労者の息子に生まれたのと似たのに、阿部謙夫がいる。

今は札幌市内になったが、かつて札幌郡篠路村と称されていた地に未開地の払い下げを受け篠路村興産株式会社を起し、藍作に成功した最初の人である滝本五郎は祖父。父は阿部宇之八。阿部宇之八は北海道における新聞界の草分けで『北海新聞』を創刊主宰し、言論機関の一方の雄であったが、息子の謙夫も父同様、北海道新聞界、放送界での功労者であった。

ここまで書いてみると、見落した人たちに気づいた。あまりにも知られている人たちであるためか。人類学者の児玉作左衛門。他界しているが、彼のアイヌ関係のコレクションは「児玉コレクション」と呼ばれ有名。秋田の産だが、五歳の時渡道したから道産子と同じようなもの。息子の謙次も父親同様アイヌ学者の一人。北大の解剖学教授である。

変わった経歴の持主に、考古学者米村喜典衛がいる。網走博物館長。昭和二十九年に国際人類学セミナーには日本代表としてアテネに出かけた。文部省から派遣されたのである。北海道文化賞をはじめ紫綬褒章など数々の賞をもらい、自分でもその数はわからないという。もともと商売は床屋だが土器や石器に魅せられてとうとう網走に住みついでしまった。

子孫。最近アイヌ絵に関した著作もあって、北海道とは関係が深い。モンゴルの研究者で京大名誉教授の岩村忍は小樽の産。そのほか学問の世界で活躍する人たちはたくさんいるが、紙数の関係で割愛せざるを得ない。

三 北方の文学

「北方の文学」などという特殊な文学が存在するというのではなく、北海道という風土を土壌として育った異質な文学は存在しているだろう。

しかし開道百年という短い年月の中で本州のように長い歴史を持った土壌から育った文学とは、あるいは異なったものが出てくるのは当然かも知れない。しかし開拓当初、詩より田を作れ式の生活環境からは文学は生まれなかつたろう。そんな時、札幌農学校の設立は、北海道に新たな郷土の文化を育成するための大きな口火になった事に疑いはないだろう。文学もやはりこの辺にスタートの糸口があるように思われる。

文学の世界で北海道といえ、反動的に有島武郎が浮かんでくる。「カインの末裔」はまさに北海道的体臭に満ちた作品である。

道産子の文壇進出第一号は武林無想庵であると『物語・北海道文学盛衰史』は記す。札幌の写真屋の草分、「武林写真館」のむすこで、武林盤雄といったのを盛一と改名し、ずっと後になって武林無想庵となった人物。

そして自叙伝『むさうあん物語』を本人の死後に妻が全国を行脚して売って歩いた話は、新聞などに出ていたから記憶している人も

いる事だろう。明治の年間には北海道には文学的所産とみるべきものは誕生しなかった。この間は道産子作家の育成期であって、それが結実するのは大正年間である。

道産子作家が世に出るまでは、むしろ中央の来道作家によって描かれた場合が多かったのは止むを得ない事であろう。

まだ植民地としての北海道であった明治年間には、漂泊の旅人的な作家たちの来道によって当時の北海道が描かれた。

例えば石川啄木、岩野泡鳴、長田幹彦などが彼等は決して北方の土壌の中に根を張ろうとした作家ではなかった。

大正年代に入るまで、それは一種の旅行者の目を通した文学にすぎなかったと考えられるのである。

北海道の文学を話題にする時、避ける事のできないのは前述の有島武郎、そして島木健作である。有島は道産子ではないが『カインの末裔』のほかに、『生れ出づる悩み』は漁夫画家木田金次郎を世の人に紹介するだけでなく、自身の苦悩を描いた傑作である。大正の時期に入ると、偶然にも二人の女流作家が世に出る。しか



素木しづ

も当時の佇立札幌高女のクラスメートである。二人の名は素木しづと森田たまである。

「巖頭の感」で青年に大きなショックを与えた藤村操の母は当時の札幌女子尋常小学校の女教師の筈。藤

このあたりから北方人の血が湧いてくる。島木健作、札幌の生まれ、『生活の探求』は第二回北村透谷賞を受けた。

島木の本名は朝倉菊雄といい、両親は仙台藩の家臣で白石に入地した。父の死後、母の手一つで育てられ貧しい暮しだった。のち北海道中学四年に編入、『北中文芸』を創刊するなど、彼の方向はすでに決定していたもののように思われる。

島木が仙台藩と関係深いつながりがある、それと同じ題材を扱った作家に本庄陸男がいる。『石狩川』の作者本庄陸男は石狩川のほとり当別太美で生まれた。まさしく『石狩川』の申し子であったと言わざるを得ない。

しかし本庄陸男は『石狩川』を三部構想としていたのだが、第一部だけで病死した。

しかしやがては北海道の文学風土の上に、本格的ロマンの幕があげられた。

久保栄の『火山灰地』である。野幌で煉瓦製造をする久保兵太郎の次男として札幌で出生。父は札幌商工会議所会頭。久保栄は劇作家であり、演出家でありまた小説家でもあった。ほかに『五稜郭血書』『林檎園日記』そして未完の大作『のぼり燕』は、稀有の大ロマンとなったであろう。



島木健作

久保栄没後十五年に当たり、北海道文学館・北海道

村は札幌中学（現・札幌南高）中退で上京、一高（旧制）在学中に自殺したのであるが、のち彼の妹恭子は安倍能成夫人。

素木しづの母と藤村操の母とは親友の間がらであったため、しづは安倍能成の口ききで藤田草平に師事したという。

素木しづは江別出身の画家上野山情貞と結婚、樋口一葉の再来とさわがれた程小説の腕をあげる。『松葉杖をつく女』『美しき牢獄』などがある。

森田たまは随筆家として知られている。『もめん随筆』などはよく読まれている。素木、森田の二人はお互にライバルであったわけである。この二人が文壇に登場したころ、幼女期を札幌で暮した中城百合子に『風に乗ってくるコロポックル』がある。

そしてまた、今十勝ワインで有名な池田町の兄の所で朝日新聞の懸賞小説『地の果てまで』を書いて一躍名をうたわれた吉屋信子も北海道に関係深い事になる。詩人竹内てるよも、女流作家の中では忘れられない人である。

やがて北海道にも北方のロマンが育ってくる。道南の松前出身の岡田三郎、釧路の中戸川吉二などが活躍しはじめた。

小林多喜二。秋田の生まれだが、四、五歳の時北海道へ来たから、ほんとうの故里は小樽であると多喜二自身も書いているから、道産子と同じである。

小樽高商（現小樽商大）を卒業して拓銀小樽支店に勤務。高商時代にはフランス語劇などにも出演し、その時伊藤整とも親しくなった。ふと知りあった田口タキという女性の身上にからまる社会問題、やがて多喜二の重要なテーマになっていく問題でもある。

新聞社とによって久保栄文学展と『林檎園日記』の公演が実施される。

小樽高商で多喜二と親しくなった伊藤整は道南の松前郡白神村に生まれたが、三歳の時小樽の近くの塩谷村に育った。今、塩谷には詩碑が立っている。『日本文壇史』をはじめ、おびただしい数の著書、編著のある事は有名である。しかし伊藤の詩集『雪明りの路』の詩人の情感は、多喜二の情感とは対照的である。

ところで北海道の風土に生き、郷土の文化を支えた人たちは数限りなくいるのだが、紙数の関係でその名だけでも記しておく。

有島の唯一の後継者だといわれている早川三代治『土と人』の刊行に心熱を注いだ。小樽の生まれである。吉田十四雄の『百姓記』辻村もと子、長見義三、佐藤喜一、木村不二男、寒川光太郎、板東三百・坂本直行など現在なお活躍中の人もいるし、すでに物故した人たちもいる。いずれも北海道の文化を支えた人たちである。

戦後、北海道を土壌として世に出ていった人たちも数多くあがる事ができる。

船山馨、八木義徳・原田康子・木野工・中沢茂などである。新しい人では渡辺淳一。

函館出身の亀井勝一郎も重要な存在だが、書きおとせない人に子母沢寛。『新選組始末記』など幕末の武士たちをペンで復活させた男といえる。本名は梅谷松太郎。石狩川を越えたと原田村がある。子母沢はこの小さな漁村で生まれた。祖父は幕末に五稜郭に立ちこもり、箱館戦争に参加した一人。敗れたのも原田に落ちのび、同じ武士七人で原田村をひらいたという。終始、新選組に魅かれた作家



寛 沢 母 子

は、子母沢をおいて他にはいないのではないだろうか。

だが、まだまだ北海道出身の作家の書きおとしがある。牧逸馬、林不忘、谷謙次の三つのペンネームで知られる長谷川海太郎は函館出身。井上靖は旭川の出身。畔柳二美は狩太、劇作家の八田尚之は小樽、評論家では亀井勝一郎のほかに小松伸六は釧路、和田芳恵は長万部、詩人吉田一穂は上磯の生まれである。そのほかたくさんの人たちがいるのだが、この項も紙数の関係で割愛せざるを得ない。

四 北方の美術・芸能

北海道の美術を考えると、明治四十一年有島武郎が中心になっていた黒百合会の誕生がそのはじまりである。有島武郎の足跡は、文学のみならず北海道の美術史の上にも重要な役割を果たしているのである。

有島といえば再度、漁夫画家木田金治郎の名をここに出そう。『生れ出づる悩み』のモデルであった木田金次郎は、やはり北海道でなければ出なかった画家であつたらう。

父親は銀行員か何かにかせようと考えていたのに、当の本人は全くのソロバン嫌い。絵描きにさせてくれて頼んだのに絶対に父は許さなかったというのが日本画の山口蓬春。芸術院会員。松前城と桜

そのほか伊藤信夫、岡部文之助、居串佳一、本間英彩など北海道美術の内部に北方のうたを歌いこめる描き手はまだ多くいる。稿が終わり近くになって、どうしても音楽芸能の世界にふれなければならぬ。

岡田嘉子の帰国は一時新聞紙上をにぎわしたが、彼女は小樽で育った。有島の長男が森雅之だというのは知らぬ者はいないだろうが、札幌には四歳まで住んでいた。映画俳優なら佐分利信がいた。歌志内の生まれ、最初は映画の監督助手になろうと思ったのが役者になったという二枚目。

中村伸郎も小樽出身、高峰秀子は函館である。中村伸郎ははじめ画家になるつもりで川端画学校へ入ったという変わり種。今は新劇の道をただ一筋に歩いている。そのほか岸柳子は幌内炭坑の出身、中村と同じように画家志望であつたのに、演劇へと進んでしまった。

音楽の世界では伊福部昭がいる。早坂文雄と共に北海道の誇る作曲家だといわれているが、二人とも北の風土からわいたものともいえるのではないか。

伊福部は釧路の出身で、林学が専門である。山奥で作曲した『日本狂詩曲』が海外で認められ、日本の作曲家の鼻を高めた。

すこし前に逆もどりするが、リバイバルブームでヒットした「君恋し」の作詩者、時雨音羽は利尻の網元のむすこ。「出船の港」の歌碑も立っている。

もう一人作詩者を忘れられない。高橋掬太郎。「酒は涙かためい

で知で知られる松前城下で生まれた。旭川の近くに入った屯田兵のむすこで、その官舎で生まれたのが抽象派の難波田竜起である。

北海道出身洋画家のうち、上野山清實ほど広く道民に親しまれ、愛された人はいなかったかも知れない。と「北海道美術史」を書いた今田敬一はその中で記しているが、江別市石狩川畔で生まれたという。

行動美術の田辺三重松は函館の出身。難波田と同じ旭川の生まれに彫刻の中原悳二郎がおり、また加藤頭清は芸術院会員。彫刻の本郷新、佐藤忠良、山内壮夫も札幌出身。

宗教画の田中忠雄は札幌、そして『原爆の国』の丸木俊子は秩父別の出身だし、久保栄の弟久保守は国画会員で札幌生まれ、一水会の中村善策は小樽で、港の風景など多く目にする事がある。

殊に明治三十六年札幌に生まれた三岸好太郎は銘記しなければならぬ。

林竹治郎の指導をうけ、のち上京して絵を独学した。道立美術館は昭和四十二年に、故三岸好太郎の遺作二百二十点の寄贈を受けて開館した。三岸は昭和九年七月、三十一歳の若さで他界した。

昭和のはじめ、フォーヴィスムの先頭に立ち激しい活動をした画人は山本菊造である。

本名を菊太郎といい、札幌に生まれ、一途にわが道をひらき初期道展時代の重要人物である。

そのほか異色の画人として、江別生まれの山田義夫がいる。リズムの鬼才といわれたが、昭和二十三年に肺結核で他界した。

きか」の作詩者だといった方が早かるう。

根室に生まれ、新聞記者もやったが、最後は上京してコロンビアに入った。

そのほか、幕別出身の万城目正。まだまだいる。「城ヶ島の雨」の故桑田貞は札幌生まれだ。

純音楽は前述の伊福部昭、早坂文雄のほかに指揮者として有名な上田仁は大野町の出身、ギターの小原安正は士別、声楽の奥田良三も札幌出身、作曲の間宮芳生は旭川出身である。

一方、このような興行に生涯をかけている男もいる。歌舞伎のソ連公演を実現させたのが旭川の本間誠一。歌舞伎のお返しに彼はソ連国立アカデミー・ロシア合唱団を日本に呼ぶ事が出来た。

* * *

長い郷土の歴史というカセのない方が、新しい。活き活きとした郷土の文化を生み出すことができるという考え方もある。そのように主張する人たちもいる。伊藤整などもそう主張している。

しかし歴史の単なる時間的な長短が、郷土の文化を育てるキーマンになるとは決まっていけないのではないか。

そこに住むわれわれが、育てられた郷土の文化そのものを、いかに受け取るかにあるのではないかと考えられるのである。

(札幌市立真駒内中学校教諭
北海道史研究協議会会員)

人物を中心とした

文化郷土史

— 青 森 県 —



SUGAI

森山 泰太郎

一 北奥の表情

青森県は、旧津軽藩・南部藩と、下北半島の斗南藩を統合した。本県を縦貫する奥羽山脈を境にして、東西二つの地域に分かれるが、東は太平洋沿岸の南部地方、西は日本海に臨む津軽地方である。陸奥湾を抱いて延びる東の下北半島と、西の津軽半島までが対象的である。

この東西両地域は、同じ本州の最北端といっても、自然・産業ともにかんがりの相違があり、まして歴史・伝統の異質が明瞭である。津軽は半年を深い雪の下で過ごす代わりに、早くから豊かな水田が開拓されて米作が中心となり、明治以後はリンゴ産業が確立した。南部は雪少なく山野の色彩も豊かであるが、夏の間しばしば冷たいヤアセ（偏東風）が吹き込んで作物がみならず、畑作が主となり、牧畜がこれに次ぐ産業となった。

中世・鎌倉方の御家人が地頭代となって津軽に下ったが、一方、甲斐の国の南部氏が下向していまの南部地方を支配した。南北朝には、南部氏が津軽一帯をも手中におさめたが、戦国時代になってその支配力が弱まったころ、津軽氏が数度の戦いで独立し、豊臣秀吉から所領の安堵をうけた。

近世の幕が明けて、両藩はそれぞれ独自の政治・文化を造成しつつ抗争対立がつづいた。明治以後になっても、それが長々尾をひき、県政や県文化の伸展の障害となったことは否めなかった。

近年秘境ブームで脚光を浴びる下北半島の斗南藩というのは、維新の際、会津藩が転封されたものである。すなわち明治元年、奥羽

列藩同盟の中心として官軍と戦って敗れた松平容保は、翌年藩祿二
三万石からわずか三万石に格下げされ、本県上北・下北地方に移さ
れて斗南藩と称したのである。藩士らは敗北の痛手に加え、未開寒
冷の辺土で苦難と窮乏の生活を送った。廢藩後、再び故郷に帰る人
々も多かったが、会津魂は空しく埋もれず、斗南藩士から幾多の逸
材が輩出したのである。

ともあれ本県は、本州北限の風土寒冷の辺地という不利な条件か
ら、歴史的にも常に政治の中心に遠く、中央文化の圏外にあった後
進地域であった。しかし地底にたくわえられた地熱のように、新鮮
で強烈な未知の活力を秘めた沃野でもあった。時にあってみごとに
花開いた北奥の群像に照明をあててみることにしよう。

二 東奥義塾と津軽の黎明

弘前の旧藩校稽古館を、明治五年の藩校廃止令から救って、私学
校東奥義塾に再生したのは、旧藩士菊池九郎(弘化四〜大正一五)で
ある。菊池はかつて慶応義塾に学んだことがあり、範を同塾にとつて
この校名にしたのであった。したがって福沢の美学尊重が建学の精
神であり、かねて英学による文明開化を撰取することであった。開校
に当たって招かれた英学教師ウオルフ夫妻によってキリスト教がも
たらされ、七年に來任した米人教師ジョン・イングは、この地方で初
の伝道を行い、洗礼をうけた塾生らと日本基督弘前公会を設立した。
なおイングは塾生らを自宅に招いてクリスマスを祝い、西洋リン
ゴを与えた。これが津軽リンゴの発祥であるといわれてきた。リン
ゴ伝来物語としては興味深いエピソードだが、実説は明治政府が殖

明治の探検家で名高い笹森儀助(弘化二〜大正四)は弘前の人。

二四年に西南日本を旅した「貧旅行記」、翌年千島を探った「千島
探検」があり、同年南島および琉球諸島の巡見記「南島探検」(明
二七刊)は、当時の琉球の民情習俗を忠実に残した記録として學術
的価値が高い。著者の探検癖は、「人のなさざるところ、またなす
を欲せざるの道を踏んで、国家のために努力」しようとする志から
であった。二七年に奄美大島の島司となって「十島状況録」を編
み、後年シベリアを旅した。三五年、郷里の青森市長となった。病
理学・細菌学を専攻し北大総長となつた今裕(明治十一〜昭和二
九)は、弘前の藩医の家に生まれた。その甥が早大名譽教授今和次
郎(明治二〜昭和四八)で服飾・生活科学・民家研究に独特な研
究を残し、考現学を提唱した。早大名譽教授柳田泉(明治二七〜昭
和四四)も弘前の人。明治文学の資料収集と、その体系的・実証的
研究で先駆者の業績が輝いている。明治文学叢刊の「政治小説研
究」、「隨筆明治文学」、「幸田露伴」ほか多数の著があり、訳書も
多い。女流文芸評論家板垣直子(五所川原市)は、弘前高女に教鞭
をとつた若き神近市子によって文学に眼を開かれたという。「欧州
文芸思潮史」「漱石文学の背景」などの著がある。理・工学関係で
は飛行機の木村秀政(五戸町)が日大教授。航空技術審議会会長。Y
S11機の開発を進め国際的技術賞をうけており、昭和四一年の全日
空機事故調査団長として究明に当たったことは記憶に新しい。東大
名譽教授・東京女子大学長の木村健二郎(弘前市)は、日本学士院
会員で日本原子力研究所理事でもある。東大名譽教授石館守三(青
森市)は東京生化学研究所所長、制癌物質の研究で著名な存在。

産興業策として各県にリンゴ苗木を配布しており、津軽の場合、こ
れを旧士族が栽培したのに始まるのである。明治一〇年、塾生珍田
捨巳(安政三〜昭和四)・佐藤愛慶(安政四〜昭和九)ら五名は、
イングの影響で彼の母校インディアナ・アズベリ大学に留学した。珍
田は後年外務省に入り、独・米・英大使を歴任し、退官後は侍従長
となった。佐藤も駐米大使のあと宮中顧問官になり、養嗣子佐藤尚
武(明治一五〜昭和四七)は外務大臣・駐ソ大使で活躍し、参議院
議長にもなった。

菊池はまた本県の自由民権運動を指導し、第一回衆議院議員や山
形県知事など、政・官界で活躍した。彼の盟友本多庸一(嘉永元〜
明治四五)は、明治三年横浜で英学を修め、キリスト教に入信し
た。イングを弘前に伴ったのも彼であった。第二代の東奥義塾長と
なり、民権運動の指導者ともなった。後年渡米して神学研究にと
め、帰朝して青山学院院长、日本メソヂスト教派の初代監督とな
り、宗教界に大きな足跡を残した。かくして東奥義塾は、明治の津
軽の青年に新時代の文運をもたらし、これを母体として近代の政
治・文化を担う幾多の人材を輩出した。その伝統をつぐ現在の私立
東奥義塾高校は、昭和四七年に開学百年記念式典をあげた。

三 学界・宗教界の人士

東奥義塾に学んだ漢学者・史家外崎覺(安政六〜昭和七)は、文
部省維新資料取調員から宮内省に入り、「殉難録稿」を編集、陵墓
監、御用係などをとつとめた。森鷗外の「淡江抽齋」に、多くの資料
を提供したことも知られる。

教育では旧斗南藩士として山川健次郎(安政元〜昭和六)理学博
士、東京帝大・京都帝大・九州帝大各総長を歴任した。八戸出身の
羽仁もと子は、大正一〇年に自由学園を開設、キリスト教的自由主
義の学風で知られた。立大総長をつとめた松下正寿も八戸の人。教
育・政治・法曹など広く活躍し、核兵器禁止運動で平和運動に寄与
している。東奥義塾長から青山学院院长・東京経済専門学校長をつと
めた国務大臣笹森順造は弘前出身である。

史学では東京文理大名譽教授松本彦次郎(明治一三〜昭和三三)
は、上北郡野辺地町の人。史論に精しく愚管抄の研究で知られた。
著書は「日本史学名著解題」「日本における史学理念の展開」な
ど。民俗学では東京教育大教授・日本民俗学会理事の直江広治(八
戸市)が、「屋敷神の研究」で知られ、能田多代子(明治二三〜昭
和四五)は出身地五戸町の習俗・方言・昔話の調査研究ですぐれた
業績を残した。小井川潤次郎(八戸市)も南部地方の民俗研究の先
達で、日本民俗学会名譽会員に推されている。

宗教界では、わが国キリスト教界の代表人物として、さきにあげ
た本多庸一があり、その指導をうけた弘前の中田重治(明治三〜昭
和一四)は、大正六年に日本ホーリネス教会を組織して初代監督と
なった。また阿部義宗(弘前市)は青山学院院长・日本メソヂスト
教会監督であった。仏教界では八戸市出身の高僧西有穆山(文政四
〜明治三四)。小田原海蔵寺で修行し、孝心を基として人心の指導
・社会の教化につとめた。明治三三年横浜の西有寺住職となり、曹
洞宗管長・大本山総持寺独住三世となった。勅特賜直心淨國禪師。

ある。二八歳で榎本健一とカヅノ・フオリ、玉木座を興し、戦後はロバ一一座芸部、コロンビア専属詩人で作品を書いた。また「めんこい仔馬」クリンゴの歌「長崎の鐘」など、数多くの童謡や流行歌を作詞して民衆に親しまれた。妹愛子は、父の生涯を小説化した「花はくれない」で文壇の注目をあつめ、昭和四四年「戦いすんで日が暮れて」で直木賞をうけた。父祖のふるさと津軽に取材したユーモア小説も多い。

石坂洋次郎は「協調性に乏しいのが私ども津軽人の気質であるが、この気質は屈折して、芸術家を育てる上では多少役立つのではないか。文学者として津軽人の根強い気質をもっとよくハッスルさせた作家は、葛西善蔵と太宰治である」と述べている。善蔵（明治四〇～昭和三）は弘前市の生まれ、早大英文科に籍をおき、徳田秋声に学んで、広津和郎・宇野浩二らと雑誌「奇蹟」を創刊した。「哀しき父」「子をつれて」「湖畔手記」などの諸作は、私小説の最高のもといわれる。窮乏の中で酒に浸り、破滅型の生活を送りながら私小説の道を固守、「小説の神様」の名をほしいままにした。全集がある。

兄弟作家として著名な今東光・日出海の父は弘前の人今武平で、日本郵船会社の船長であった。東光は関西学院を中退し、大正十二年創刊の初期の「文芸春秋」同人となった。昭和五年浅草で剃髪し比叡山にこもったが、二六年八尾市の天台院住職となった。河内のもつ自然と人情が彩る河内もの「に軽妙な筆をふるったのはこれからである。三二年「お吟さま」で直木賞をうけ、現在平泉中尊寺住職で参議院議員。彼は反骨の意識をそのままに、屈曲の多い人生

のあたる坂道」などで多くの読者の支持をうけたが、「石中先生行状記」といったユーモラスな中間小説もあり、「馬車物語」など津軽色の濃い作品もある。健全な常識にたち、明快な作品を書き続けた功績で、四一年に菊池寛賞をうけた。

津軽出身の作家では北畠八穂（青森市）がある。四季派の詩人で、小説「鎌倉夫人」など。童話作家で、四七年に野間児童文学賞をうけた。今官一（弘前市）は「壁の花」で三一年に直木賞。長部日出雄（弘前市）はことし「津軽世去れ節」で同賞をうけた。三浦哲郎は八戸市出身。三五年「忍ぶ川」で芥川賞をうけ、NHKドラマでは全国の視聴をあつめた「蘭子ひとり」の作者でもある。推理小説では「刺青殺人事件」で一時代を画した高木彬光（青森市）は、戦後の推理小説界に大きな影響を与えた。

詩 明治の反戦誌人として、戦後再評価された大塚甲山明治一三（同四四）は、上北郡浦野館村（現東北町）に生まれた。本名寿助。三五年上京し、はじめ句作や俳論を発表し、内藤鳴雪・河東碧梧桐・坪内逍遙・与謝野鉄幹らの知遇を得た。日露戦争が起こると、平民新聞の反戦論に



共鳴して社会主義協会に入り、農民詩・反戦詩を発表した。三七年の「今のはのうつしゑ」は、与謝野晶子の「君死にたまふことなかれ」に先立つこと二か月という。また

を気ままに遍歴し、毒舌説法で時世を諷刺する特異な存在である。日出海は東大仏文科卒。音楽・美術に造詣が深く、また池谷信三郎・船橋聖一らと劇団心座や蠅蝸座を創めたこともある。パリに外遊し、国際的感覚の豊かな文化人として知られる。良識に富んだ明るい作品が多く、昭和五年「天皇の帽子」で直木賞をうけた。作家にはめずらしい文化教育行政にたずさわり、文部省芸術課長や文化庁長官をつとめた。

太宰治（明治四二～昭和二三）は本名津島修治、生家は北津軽郡金木町で、津軽有数の大地主であった。封建的な家庭で育ち、青森中学・弘前高校時代から文学に親しみ、東大入学の際、井伏鱒二に会い終生師事した。「二十世紀旗手」「富嶽百景」「津軽」をはじめ、戦後の「斜陽」「人間失格」などで多彩な才能を開花させた。彼はいっさいの権威に対する反逆と、愛と真実を求める精神で貫き、多くの熱狂的な愛読者を集めた。三八歳で玉川上水に投身するまで、たびたび自殺をはかるまで苦難と波乱にみちた奔放な生涯であった。郷里の旧家は旅館となり、名も「斜陽館」という。太宰巡礼者の訪れが跡を絶たない。毎年六月十九日東京と金木町で彼を偲ぶ「桜桃忌」が催される。

わが国文壇の代表的存在である石坂洋次郎は弘前市出身。慶大國文科を出て弘前や秋田県で教師をしながら、昭和八年から「三田文学」に「若い人」を連載し好評を博した。この作品で三田文学賞を得、一躍流行作家となった。一年上京して文筆生活に入った。「晩の合唱」「丘は花さかり」などの作品は、学校環境を舞台にした小説で、甘美で健康な明るさにみちている。戦後「青い山脈」「陽

「新小説」に詩と随筆を載せたが、これに対して徳富蘆花は「殆どせられなば、或は我国の新バンスとならるる人にあらずや」と評した。森鷗外の世話で日露戦役衛生史編さん事務所の雇員となったが、病のため帰郷して没した。社会主義詩人としてすぐれた作品を発表したが、若くして終わったために、彼の詩で世に知られていたのは、後藤宙外の「明治文壇回顧録」にある三篇だけであった。戦後、未刊の詩稿が郷里の人々の手で刊行されるようになった。

詩集「太陽の子」の作者福士幸次郎（明治二二～昭和二一）は弘前市出身。上京して秋田雨雀（後述）を知り、文学に心を向けた。雨雀の紹介で同郷の先輩佐藤紅緑の書生となった。明治四二年、が見東明の「自由詩社パンフレット」に啓発されて詩作を始め、わが国自由詩勃興期を代表する一人となった。彼は自由詩のリズムに苦しみ、日本語そのもののリズム論を書いたのが著名な「日本音律論」である。一方、土地の精神が人間を作るといふ伝統主義を、その根底にある地方主義に立つ文芸活動を提唱した。晩年には地方文化の実証的研究として、わが国の原始製鉄をさぐる「原日本考」を書いた。（次頁写真）は昭和三年、弘前公園に建てられた幸次郎の詩碑。幸次郎から方言詩を書くよう奨められた高木泰造（青森市）は、津軽人の素朴な生活と感情を生の方言でつづった詩集「まるめる」は、詩壇に特異な存在を占め、英訳されて海外にも反響を呼んだ。短歌 青森市出身の大井富梧（明治二二～昭和二二）は、東京高師在学中から与謝野鉄幹に私淑し、のち新詩社の歌会にも出席した。「明星」前期の歌人として「明星の十哲」の一人にあげられた。クリスチャンで、宗教的色彩の強い歌が多い。盛岡中学に教鞭をと



福士幸次郎 文学碑

り、石川啄木らに指導したエピソードがある。北津軽郡には和田山蘭(明治一五)昭和三二)・加藤東籬(明治一〇)昭和一九)らが出た。

若山牧水の「創作」

同人として活躍した。山蘭は書家としても知られ、泰東書道院常務理事として重きをなした。明治末期から口語歌に親しみ、わが国口語歌の先駆者である鳴海要吉(明治一六)昭和三四)は、黒石市に生まれ、少年時代から島崎藤村に傾倒し、明治三七年北海道に赴く藤村を、友人秋田雨雀と二人で青森に迎え入れたこともある。翌年藤村の世話で上京し、田山花袋の書生になった。間もなく病気で帰郷、下北半島佐井村の小学校教師となった。代表作といわれる次の一首は、その時のものである。

あきらめの旅ではあった
磯の先の

白い灯台に

日がさしていた

大正二年再び上京、土岐哀果のローマ字社につとめ、翌年ローマ字歌集「土にかへれ」を出した。同一五年に口語歌誌「新緑」を創刊し、生涯の事業とした。

館代市から本県五所川原市に移った八木隆一郎(明治三九)昭和四〇)は、文学を志して上京し左翼劇場に参加。生活に苦しみながら文学活動をつづけ、昭和一年に代表作といわれる「わが母は聖母なりき」を書き、「熊の唄」は明治座で井上正夫一座が上演した。北条秀司・水谷八重子らと知り、以後ミュージカルや映画シナリオなどで活躍した。

六 芸術・芸能の異彩

日本画壇では、弘前の人野沢如洋(慶応元)昭和一二)が異彩を放った明治二六年京都に出て四条・円山派の今尾景年の客員となり、二八年に早くも日本美術協会展で一等入選の「連山紅葉」が宮内省お買上げになった。以後、各種展覧会に連続入選し、栖鳳と並んで京阪に画名があがった。三七年中国に渡り遊歴五年、東洋画の真髄を探ったが、この間、大観、玉堂らと文展審査員に推されたが固辞し、爾来反官展主義を貫いて、独自の芸術開拓に邁進した。大正八年から欧米を巡り、昭和五年東京に転住した。円熟した水墨画法



で、写生に立脚した山水・花鳥・人物などあらゆる面題を自在な運筆で表現し、他の追随を許さなかった。好んで馬を描き、「馬の如洋」と称された。

如洋と対象的な画風で

戯曲 わが国新劇運動の指導者として著名な小山内薫(明治一四)昭和三)は広島で生まれたが、父玄洋は旧津軽藩医で、広島陸軍病院長であった。東大英文科を出て新劇界に入り北欧近代劇運動をとり入れた。欧州から帰朝した左団次と組んで、明治四二年に自由劇場を創立し、イブセン劇を公演した。大正一三年、土方与志らと築地小劇場をおこし、イブセン・チェホフ・ゴリキーなどの作品を演出した。また「新思潮」創刊にもあずかり、多くの小説・戯曲をこれに発表した。女流作家岡田八千代はその妹である。

さて、昭和二年にソ連革命十周年祭に国賓として招かれた薫と、かの地で行を共にしたのは黒石市出身の秋田雨雀(明治一六)昭和三七)である。はじめ詩や小説を書いたが、早大卒業後、小山内薫の「新思潮」の編集に従い、戯曲を書き始めた。つづいて新劇運動や社会主義運動にも活躍した。大正以後童話を書き、晩年に及んで、戦後、児童文学協会会長をつとめ、また東京池袋に舞台芸術学院を創設して、若い演劇人の養成に努めた。詩集「黎明」、戯曲集「埋れた春」、童話集「太陽と花園」など多くの著書がある。八戸の人北村小松(明治三六)昭和三九)、は慶大文学部卒。小山内薫の門下となり、松竹蒲田撮影所で戯曲脚本の制作活動をした。昭和六年わが国最初のトーキー映画「マダムと女房」のシナリオを書いた。戯曲集「猿からもらった柿の種」がある。寺山修司(青森市)は、短歌・俳句・詩・小説・演劇・映画と、あまりにも多方面に活躍をし、異端の作家といわれる。映画監督第一回作品は「書を捨てて町へ出よう」であった。演劇実験室「天井桟敷」を率いて、ヨーロッパ各国で上演した。戯曲集「寺山修司の戯曲」などがある。秋田県

萬谷竜岬(明治一九)昭和九)が名高い。弘前の人で、寺崎広業門下。大正三年「静日」で文展入選、次第に頭角をあらわし、「御堂の春」「霜の大原」などで認められ、帝國美術院委員となる。その後も好んで平家物語に取材し、精麗な土佐派の筆致で「浦の御座船」「寿永の春」などの傑作を残した。現在の日本画壇では、新制作展会員工藤甲人(弘前市)が第一線作家である。蝶を配した幻想的で精緻な画風で、三九年の現代日本美術展に招待出品した「地の手と目」が、優秀賞となった。洋画では山羊を描く日展の奈良岡正夫(弘前市)が、数少ない動物画家として知られ、国画展の小館善四郎(青森市)、二科では異色の幻想派鷹山宇一(七戸町)などがいる。

いまや「世界のムナカタ」といわれる板画家棟方志功は青森市出身、苦学立行して上京し、独自の板画道を開拓した。昭和一三年に板画「善知鳥」が帝展特選、以後「釈迦十大弟子」(昭和一五)。「女人觀世音」(同二六)。「柳緑花紅頰」(同三一)などで国際板画大賞をうけ、欧州巡回展で海外にも多くのファンを得た。彼の芸術の源流には、津軽のネブタ絵と風俗があり、繩文的原点の色と土着の生命感が溢れているといわれる。昭和四五年文化勲章をうけた。これを記念する本県の志功記念館が、近く青森市に建てられる。青森は版画王国といわれ、関野潤一郎(青森市)ら志功につぐ老練・中堅の版画家が多い。

彫刻では弘前市出身の前田照雲(明治一二)大正一三)が知られた。高村光雲に学び、大正初期に活躍し、特に馬体彫刻にすぐれた。中野桂樹(明治二二)昭和四〇)は西洋彫刻木造町の人、日展

委員・審査委員をつとめた。三國慶一（弘前市）も日展評議員・審査委員である。金属工芸では小林尚珉（青森市）が、日展会員・同審査委員である。

音楽では、作曲家明本京静（明治三八）昭和四七）は黒石市の人。近衛秀麿に師事し、新交響楽団でテナー独唱に選ばれた。のち作詞・作曲・独唱の三分野で活躍した。代表作「父よあなたは強かった」「学徒動員の歌」などが広く愛唱された。若手の作曲家では間宮芳生（青森市）が、尾高賞・中西賞をうけ、現代音楽の旗手的存在である。木村繁（弘前市）は福士幸次郎に文学を、近衛秀麿に音楽の指導をうけた。津軽のわらべ歌を編曲した「津軽の旋律」は、地方音楽文化に新しい方向を打出した。

舞踊家ではモダン・ダンスの草分け江口隆哉（野辺地町）は、昭和四年高田雅夫・せい子舞踊団に入所。六年に渡仏し、モダン・ダンスを修める。八年にベルリンの発表会でデビューした。翌年帰朝してわが国最初のモダン・ダンスの発表会を開いた。各種芸術賞をうけ、月刊誌「現代舞踊」を主宰している。門下の江口乙矢（野辺地町）は、昭和二〇年大阪に舞踊研究所を開いて活躍している。

演劇では、劇団「民芸」の中堅女優として舞台に放送に活躍している奈良岡朋子（弘前市）、映画では東宝俳優の田崎潤（青森市）がある。映画監督川島雄三（大正七）昭和三八）は、むつ市出身、明大卒。昭和一三年松竹に入社し木下恵介に師事した。日活に移り代表作「幕末太陽伝」「雁の寺」を制作した。シナリオ・ライターでは東宝映画「いつの日君かえる」などの作品で知られる小国英雄（八戸市）は、大御所的存在である。

最後に歌謡曲。何といっても「ブルースの女王」淡谷のり子（青森市）。東洋音楽学校卒業後、ポリドール・コロンビア・ビクターの各社で活躍。ヒット曲「別れのブルース」「君忘れじのブルース」など一世を風靡した。奈良光枝（弘前市）はコロンビア専属で、昭和二年「悲しき竹笛」でデビューし、「青い山脈」が若い人々に愛唱された。菅原郷々子（十和田市）は、独特なバイブレーションで「月はとっても青いから」を歌った。作曲では上原げんと（大正三）昭和四〇）がいる。木造町出身で、ヒットメロデーは「花売り娘シリーズ」のほか、「渡り鳥いつ帰る」「東京のバスガール」など、庶民の心情をゆさぶったものが多い。

*

*

青森県の生んだ文化人は、ひとくちに言って南部人の思索的・内省的であり、津軽人は感覚的ではなやかな詩情に富む。ニュアンスの違いはあっても、いちようにかたくななまでに強烈な自我と個性をもち、反権威主義を貫く孤高独往の姿勢に終始した場合が多い。そして自らの生命を燃やし、豊かな才能を發揮するために、新しい立脚点を求めて苦闘しつつ、前進のエネルギーを爆発させた。かくして多くは異端の文芸・芸術となって開花したのである。

北に偏在した宿命から、地元の文化的土壌の貧しさと、都会的ポイズへのあこがれから、常に異郷に舞台を求め、行動は互いに連帯のない個人プレーが多かった。新しい地方文化を開発するためにも、県人はこれら先人の足跡を回顧し、自省しなければならぬだろう。

（青森県立青森北高校長
青森県文化財専門委員）

人物を中心とした

文化郷土史

—岩手県—



池 巳 莊 森

〇一山百文のトバ

白河以北は一山百文——という言葉がある。これは文字通りコトバであって、コトバ以外の何ものであるか、素姓がはっきりしない。ずいぶん昔から、筆者は注意して見ているのであるが、高名な字引きに、「さらさら」であって価値の低いもの。十把ひとからげ、二束三文」と書いてあり、解釈としては、うなづかせるものだが、それと白河以北と合併して成句となったのは、いつのことなのか、どうもはっきりしないのである。

自分からいやしめた東北人の造語なのか、江戸人あるいは西南日本人の、あざけりの台詞なのか、流行語としてもはやされ、定着したのは、明治初期らしい感じのだが……とか、原敬を奮起させた精神のなかに、このコトバが、いくらかは、起爆剤としてまじっていたのではないかなどと、思いは、はっきりしない。だが、文化というよりも政治に関しての言葉だったらしい感じはあるが石川啄木や宮沢賢治と、一山百文との関係はどうなるか。コトバの歴史性も考えると不思議である。

〇原敬と原抱琴

大正六年九月八日、盛岡市の名刹・北山の報恩寺で戊辰戦争の五十年祭が、旧藩生き残りの人たちによってとり行われたことがあった。そのとき帰郷中だった政友会総裁原敬は、朝廷に弓ひく者という汚名をそごうと、簡明で力強い祭文を朗読した。彼の肩書は、「旧藩の一人・原敬」だった。その日の日記に、原敬は次のように書いている。

「盛岡にて戊辰戦争殉難者の五十年祭を営みける時、祭文を求められ、余は戊辰戦争は政見の異動のみ、誰が朝廷に弓をひく者あらんや、と言ひてその宛をそそげり。」

焚く香の煙のみだれや秋の風 一山

この一山に注目しよう。藩閥明治政府が、東北を指して「白河以北一山百文」という蔑視をとって「一山」と号した原敬の腹中であつたものを、われわれの先輩は重視しなければならなかつたのであろう。思うに原抱琴が、明治俳壇に残した天才天折の風貌は、原敬のその天折を惜しんだ衷情と同様のものがあつたであらう。

原抱琴、本名達は、明治十六年二月二日盛岡市に生まれ、三十歳にして明治四十五年一月十七日この世を去つた。原敬の兄恭の長男である。岩動炎天氏は「資性頗る温厚にして高尚・快濶にして義氣に富み、頭腦明晰、學術常に優等であつたが惜しむらくは身体が強壯でなかつた」と書いてゐる。

盛岡中学——府立一中——一高——東京外語——帝大法科と學び、十七歳中学五年正岡子規を俳句の師と仰ぐ。三十二年入門同年十月の虚子庵會で、抱琴は二十四点の最高得点者となり高点句は「裏戸出て貰菊切りけり露時雨」という句であつた。現在抱琴の句は千二百句ほど残されているが、そのほとんどが、明治三十三、四年の二年間に得られたものである。

府立一中時代はじめて師子規のもとを訪ねた抱琴に對した子規は、その余りの若さに、「君はほんとうに原抱琴か」と訊ねたという。抱琴が高等学校在学中病臥したとき、子規は次の一句を赤い画仙紙に書いて抱琴に贈つた。

同病相憐

この座敷は、賢治の病氣療養のために建てられたものであつたが、昭和八年九月二十一日に、この座敷のできないうちに賢治は死んだ。そのとき土台はできていたが、まだ柱だてはしていないうちであつた。

仏間から台所まである独立家屋である。

ここにしばらく安住できそうに見えた。

だが丸三か月のち、八月はじめに花巻は空襲にあひ、中心部の大半は焼失した。宮沢家も本屋・離れ座敷ともに焼け落ち、光太郎は危く死をまぬがれ、父光雲作の小さな、手のひらに入る木の観世音像ひとつを持ち、猛火をくぐつて助かつた。

そして十月、花巻在太田村山口に再疎開。光太郎のこのとき入つた家は、そのままの姿で、現在も套屋の中に、安らかに存在している。家というほどの物ではない。山奥から運んできた菅林署の飯場のそまつな小屋であつた。山を背にした山の中に、南面しているだけにとりえであつた。

ここでの光太郎の生活は、物心ともに困難を極めたものようであつたが、もっともつらかつたのは、戦争協力者としての自分についての自責による想念と、真向から闘わなければならぬことであつた。そして、数々の詩篇が残つた。山口での光太郎は、全く彫刻を棄てて一作も残していないが、そのかわりとも言えるように、多くの書を書いた。それらは、いま世に珍重されている。

○山田美妙の評価

石川啄木が雑誌『小天地』第一号を発刊して意気大いにあがつたころ、明治三十六年十月十八日三上賢三（桜翠）にあてた長い手紙

寝床並べて毒喰はゞや話さばや 子規
また大色紙へ次のように書いて贈つた。

雲門日葉病 相治尽大地 是葉那箇 是自己。
此馬鹿野郎腰骨ヲ叩キ折ッテ鉛ヲツギコマザレバ病氣ノ味ヲ知ラジ 老禿驢頭ヲ撫デハ来レ

奈良茶飯 三石
蕪漬物 一桶

明治三十五年一月

追伸 丸吞ニスル勿レ老婆心切

抱琴詞兄

原抱琴は、どんなに師匠子規に期待・親愛されたかがわかる。河東碧梧桐が、書いた弔文と弔句からどんなに同門の先輩が彼の死をなげき悲しんだかがしのばれる。伯父の原敬は原敬で、政治的な後継者としての達を喪つて、どんなに落胆したかも想像に余りがある。残念なことに、この稀有な天才、恐らくは賢治・啄木にも匹敵する芸術家としては、世に伝わらない。抱琴は、學問に力を注いで、句が純良絶佳なものと評価されながらも、啄木・賢治のように、相当量の作品を残さなかつたことや、俳句という芸術が浅いものであるということにも原因があらう。

○高村光太郎の疎開

さて、戦争中岩手県に、昭和二十年五月疎開した芸術家がある。高村光太郎である。光太郎は、宮沢賢治の縁で、岩手県花巻町宮沢清六方に疎開してきた。豊沢町の宮沢家宅は、道路に面した本屋のほかに、裏の畑の中に建つた離れ座敷があつた。

がある。有名な手紙であるが、これを書くのに四日かかつたと追伸にある。この手紙の中に「明治文学と岩手との關係は、唯一山田美妙あるのみに候へど、この維新後の当地方の萎靡振ざりは文学のみにあらず……」という一節がある。美妙は周知のように、言文一致体の小説の創始者として、日本文芸史の上では、二葉亭四迷と並び称されているが、美妙の方が四迷にやや先んじていると、現在では言われている。けれども小説の表記法ではなくて内容については、四迷の方に重みがあるというのも定説である。

ただ美妙には、小説の作者としてよりも、『大日本辞書』の著者として、近來は評価が出て来ている。大槻文彦が『日本辞書言海』を出版したのが明治二十二年五月から、明治二十四年四月までに四分冊を刊行した。美妙は明治二十五年七月から明治二十六年十二月までに十二分冊の『日本大辞書』を刊行した。美妙は父が岩手県人だが南部人、文彦は父祖が仙台藩人であり、いずれも準岩手県人である。明治のもっとも大きな辞書が、二人によって出版されたことは、興味深いものである。

このとき文彦四十六歳、美妙二十五歳。



山田美妙

アイヌ語と現代文の研究で知られる金田一博士は、アクセントをつけた現代の当用辞典を作つたのであるが、博士は「私の『辞海』も『明解国語辞典』も、図らずもこの郷土の大先輩の方法を採用させていた

ことにした」と、美妙の功績を述べている。

金田一博士は、当用漢字と現代かなづかいを最終的に決定した人として知られているが、明治・大正・昭和と三代にわたって、アクトメントのある辞典の編纂者として博士と美妙とつながりがあったことは、白河以北の東北人のブーズ弁と、それを恥ずかしがる深層心理学的に潜在するものがあつたのではないかと、筆者は思っている。美妙が言文一致の小説よりも、辞典で後代にのこるだろうということをまとめよう。

その第一の理由。『日本大辞書』と『大辞典』は、ともに現在出ている大型辞書の原型(プロト・タイプ)であること。その第二の理由・日本で辞書にはじめてアクトメントをつけた創始者であること。その第三。『日本大辞書』に『言海』の批判を堂々と、しかも数多くにわたって書いてあること。その第四。口語文で説明を書いたこと等である。

○大等と泰賢

仏教のことに話題をかえよう。嶺南島地大等は、宮沢賢治が盛岡高等農林学校の在学中大正四年の春から同七年の春まで毎年盛岡市北山願教寺で一週間にわたって開催される仏教夏期講座に出席した。これは早晩講座で朝早かった。賢治が死にのぞんで、父に「国訳法華経を一千部つくって知己に贈るようにと遺言した。その種本が島地大等の『和漢対訳妙法蓮華経』であつたことはよく知られている。仏教のことでは、東京大学で刑法を講じた小野清一郎博士は、深く仏教に傾伏しておられる。藩政時代大財閥だった小野の一族は、薩長政府にふみにじられて、全国的だった財閥が、全くおちぶれて



宮 沢 賢 治

もう少し長く生きていたならば、恐らく啄木は彼の自説にしたがって、多行書きの短歌を書いたのではないかと筆者は考えている。

賢治は、先輩啄木の創見を、みごとに実行した。三行、四行、五行の短歌を数百首も作った賢治は、短歌の形式の革新者としては、啄木の志向を完全に受けついでたものといふことができる。但し賢治の短歌は、その大部分が少年期をようやく脱した十六、七歳(明治四十四年ごろ)から二十六歳まで(大正十年)までの作品で、およそ九百数十首、これを一冊にまとめて「発表を要せず」と朱書したものである。幼稚な作と後年考えたものであろう。

啄木と賢治は、いやでも比較の対象になる。その中で、筆者が特に興味を持っているのは、啄木は寺院の生まれであるが、そのことに何ら精神的な影響はないこと、賢治は、商家に生まれながら、篤信な在家仏教家であった父の影響をうけて、彼の行動と作品の上に重大な結果をもたらしているという点である。

また、啄木の貧窮な生活は、母親の結核を全家族が、かぶるよう

しまった。後年の小野博士の母堂は、手づくりの餅菓子売って博士を育て上げたといえられている。

岩手県は、東京帝国大学に『印度哲学』の講座を創設した木村泰賢を生んだ。泰賢は幼名は二蔵。父は三男二女を残して死に、一家は困惑した。二蔵は岩手郡田頭村東慈寺の住職村山実定に拾われ、十二歳のときに仏弟子となり、得度して名を泰賢と改めた。曹洞宗大学林、東京帝大文学部に入り恩賜の時計を戴いて卒業した。曹洞宗大学教授となり印度哲学の研究に心血をそそぎ、大正四年には『印度六派哲学』を著述して世界の仏教学界を驚かした。欧州各地を遍歴、ドイツに留学したが大正十一年帰朝した。講義に著述に深く広い学識をうたわれたが、昭和五年突然狭心症の発作で五十歳を一類として永眠、学界から大いに惜しまれた。

○啄木と賢治の短歌



石 川 啄 木

石川啄木と宮沢賢治は、文字通り「世界の詩人」になったが、啄木は明治十九年生まれ、賢治は明治二十九年生まれだから、生年は十年のちがいしかない。が、啄木は明治四十五年(昭和十一年)に死に、賢治は昭和八年の死であるから、二十三年のへだたりがある。このことから、啄木と賢治は、相当の年月が間にあると、思い誤まれることがある。啄木が朝日歌壇の選者になり、多くの短歌について

の評論を発表したころ、少年賢治は短歌を作りはじめた。「短歌は何行に書いてもよい筈だと言った啄木が、三行書きの中でだけ、表現の工夫をこらして、とうとう四行、五行書きの短歌を作らないでしまった。

○萬鉄五郎のこと

岩手県は、啄木・賢治と同じように、型やぶりの優れた造型芸術家を生んでいる。その最大なもの、萬鉄五郎である。五郎は、昭和二年五月一日神奈川県茅ヶ崎の自宅で死んだ。

萬は二十一歳の明治三十九年三月早稲田中学校を卒業すると、五月宗活禅師ほか仏教関係の人たちとアメリカにわたった。アメリカ人の家庭に働きながら住みこみ、美術を勉強しようとしたが、志を果たせずに帰国した。ヨーロッパに留学したことはない。明治四十四年四月東京美術学校西洋科予備科に入學。九月本科に進んだ。十月白馬会展に「風景」出品。明治四十二年淑子と結婚。明治四十五年



萬 鉄 五 郎

東京美術学校西洋画本科を卒業。引続いて研究科在籍。卒業制作は「裸体美人」「自画像」である。この卒業制作の二点は、こんにちでは日本において描かれたフォービズムの記念的な作品として高名なも

のである。しかしこのとき萬は卒業式に平井為成、山下鉄之輔とともに欠席した。画家として専念するために、教職免許もとらなかつた。この作品は、「大胆な構図・配色で、気持ちのよい解放感を盛り、個性尊重と感覚の解放を旗印として新時代到来の前奏曲となった」が卒業制作の点では、「藤島武二教授を中心とする教授陣に歓迎されなかつた」。そして既成画壇も、これとあい応ずるように、全く無視したとある。

共感を寄せたのは、級生たちと、ほんの一部の若い画家たちだけであつた。

卒業制作には、七十二点と点数があつた。卒業席次は、西洋画本科生十九人中の十六番であつた。萬は在学中は優れた成績だったがから、どんな作品を描けばよいかを、よく心得ていたのだからこれは勇敢な行動だつたといつてよい。

大正三年二十九歳の萬は、一家をあげて和賀郡土沢町に帰つてきた。そして猛烈を極める制作がはじまる。中央の画壇や海外からの刺激と隔絶した状況の中に自分自身を置いて、自分の仕事を検証し、新しい制作の方向をさぐるうとしたのである。

「自分が目をあけているときは、即ち絵を描いている時だ」と友人の小林徳三郎に手紙を書いた。このころのことを淑子夫人は、こゝろも語っている。

「市日には在方から多くの人が出てくるので、その風俗をガラス越しに一心に写生していました。朝八時ごろから、夜まで夢中でした。

萬は造型思考の実験材のために自画像を描いた。そしてキュービスム風な作品が現れた。多彩を棄て、セピア系のモノクロームにわ

設美術科になったことを思うと、岩手は造型芸術については、ゆたかな土地であらう。

川徳というデパートの特設の展覧会場で、村上善男展が九月九日まで開かれていた。村上は昭和八年三月八日生まれたが、先日はパリで個展を開いた。鎌倉近代美術館や国立近代美術館のコレクションにも入っている。抽象画家であるが、注射器の針とか、天気図だとか、芸術になりそうもない素材で、いかにもこれは現代の芸術だと感じさせる作品を作っている。パリに住んでいる独立系の画家高橋忠彌（平賀敬の師弟）に用があるなら伝えると、村上の会場で奈知安太郎画伯（明治四十二年二月六日生まれ）がパリにゆくことを筆者に告げた。そしてまたエコー・ド・エヌという岩手県若手の人たち百余人の芸術団体が来年パリで合同展覧会を開くという説もある。

また、ニューヨークで個展を開いた沢田哲郎は藤田嗣治のたつたひとりの「内弟子」のような関係にあつた。

こういう話の中へ、また別のジャンルの芸術家のいることも告げなければなるまい。

○鉄造型芸術家

茶の湯釜と南部鉄瓶の作者鈴木繁吉（号盛久）が、文化庁から国の無形文化財指定をうけた。盛久は日展特選、ブリュッセル万国博のグランプリ賞までをもらっているが、十三代南部鑄物師として続いてきた家の当主。そして子息は、名は貫爾。芸大の鑄金科の教授で、清新・尖鋭な作風で知られている。

大正二年八月二十七日釜屋（鉄瓶製造業）釜定の二代宮島太郎

ずかな青や緑を配してフォルムに迫つた。そしてキュービクな画面が、ここに生まれた。和賀土沢の田舎で、パリの画壇が生んだものと同じものを、独自に生んだのである。土沢では、水墨もかき、盛岡で催した会員百五十三人の画会のために、多くの作品を描いた。肖像画の部、風景画の部、掛軸の部——それは分けられていた。

大正五年三十一歳。家族とともに再び上京したが、大正八年制作は夜となって、造型理論の克服などと重なり、不眠・過勞から・神経衰弱となり茅が崎に転住した。茅が崎では最も多く南画（日本画）が制作された。

萬鉄五郎は昭和二年五月一日茅が崎で亡くなった。四十二歳の若さだつた。そのとき多くの人が萬鉄五郎の死をいたんだ文章を書いたが、昭和二年六月号の美術新論の文中に「萬君を悼む」という斎藤与里は、「萬君の芸術は全然君唯一人のものであつた。萬君が死んでしまつては、もうああいふ絵は出来ない。社会が萬君を殺したとは断言しないが、萬君は、社会から適当に遇されてはゐなかつた」と書いた。それから昭和四十七年、萬作品の油絵や水墨三百数十点が、篤志の蒐集家から岩手県庁に譲られた。巨匠をしのぶ作品が故郷に帰つたことは、萬自身を、あの世で心を安らかにさせたことであらう。

○県出身の洋画家

大正十年時代帝展の入選者が、岩手県人に二十八名あつて、それは東京以北の全部の入選者に匹敵する数だつたと言われていた。ひとりずつの画伯の名をあげないが、疎開していた中央の画家・彫刻家たちを先生に、県立の美術学校が創設され、それが岩手大学の特

は、日展ではじめて鉄瓶が入選した南部鉄瓶の作者である。昭和二十六年第七回日展へ「竹雀紋様」の南部鉄瓶が入選、連続三年入選した。彼は新しい鉄器の造型を志して灰皿は数十種、ほかにも種々の作品を売り出して好評を博した。NHKが四十数種の彼の鉄製灰皿を購入して小道具に使っている。彼は昭和四十三年九月二十七日五十六歳で亡くなって惜しまれた。

彫刻には、盛岡出身堀江尚志がいる。明治三十一年生まれ。昭和十年六月五日三十八歳で若死した。東京美術学校の出身。入学したところ、彫塑科の室内が土足のまま出入りしていたので、尚志は朝早く登校。タスキがけで拭きとり、土足で入れないようにしたという一つ話を残した。大正九年、十年と続けて帝展特選。人体と同じに、兎や鯉の傑作を残している。彼は意にみたぬ作品は、こわしてしまつたので遺作は二十にみならず、珍重されている。

後輩の舟越保武は芸大教授・戦後復旧した長崎の教会のために二十六聖人の像を造つたことで知られている。県運動公園の男性像・岩手県民会館の女性像・盛岡市役所後庭の少年像まで市民の目を娛しませているが、隣県秋田の田沢湖中にある女神像は有名だ。

○一人の写真芸術家

もう一人の造型芸術家を紹介しよう。映像作家・或は彫像作家といつてもいいかも知れぬ写真芸術家である。近藤一彦と内村皓一であるが、近藤はまだ若く、これからまだまだ伸びる作家であるが内村は第一線から引退したと言っているので、内村に登場を願うこととする。

彼は、大正三年七月十五日盛岡市新小路に出生。現在は花巻市で活

版印刷を業とする。女子師範付属小学校に入学五年生のとき写真に興味を持ち、小学生の間に流行の一円カメラで写真をうつし始めた。盛岡商業に入学とともに、盛岡の写真家唐武に入門。昭和十五年奉天に徴用、九一八部隊の理研で顕微鏡写真に従事。昭和二十一年帰国した。高村光太郎の知遇をうけ、芸術の本質について教わった。満州で、人間を中心に写した三千枚のフィルムを日本敗戦によって焼き棄て、自ら選んだ三十枚のフィルムを、荷札の間にはりつけて満州から郷里花巻に帰った。三千枚を喪ったことで彼の作品は、よりきらきらと輝く宝珠のように、数々の栄光を得た。

世界三十数国の各都市のサロンに、延千五百点の作品が入選し、イギリス王立ロイヤルアカデミー賞を受賞。オーストリアのウィーン写真協会から、日本最初の名誉会員を指定された。欧米三十数国主要都市で招待個人展を巡回の形で行っている。作品は満州でのもの三十点のほか、全部内村の生活する花巻を中心に写されたものである。いまは後進の指導に専心している。

○異色の染色芸術家

もう一人の異色の芸術家を紹介しよう。染色の及川全三である。明治二十五年十一月十一日当時の和賀郡土沢町に生まれ、いまは改称した東和町に住んでいる。岩手師範卒業以来東京で教職にあつたこともある。東和町が藩政時代から和紙を生産していたことから及川はその紙やホームズパンを染色することをはじめた。紙の染めたものも、高雅な淡い色彩で、心ある人の出版や種々工芸作品に使われているが、何しろ和紙の生産に限度があるらしい。がホームズパンは、弟子数人が独立して制作しているがなかなか生産が必要に迫

つかないという。手ざわりといい染草の草木染めといい、ホームズパンのマフラー、服地、ネクタイ・コート、いろいろの高級衣料として、ことに大都市の市民に迎えられ定期的にデパートで発表即売会を開いている。むかしからの草木染めに、新しい創意と工夫を加える仕事に及川は老いを知らずにはげんでいる。及川は福田ハレほか、有数な弟子を育てて、いつでも年若い女性を内弟として教育している。

○日本の詩朗読の創始者

照井栄三は、明治二十一年盛岡生まれ。明治四十年二十歳渡米。大正八年渡仏。文学・音楽を勉強。昭和二年には、フランス歌謡とスペイン歌謡を日本ではじめて歌った。楽壇に贈られたヨーロッパの新風だった。昭和九年大阪から高村光太郎の詩を放送、日本の朗読の開拓者になった。昭和十三年日本ではじめての詩の朗読の個人発表会を郷里盛岡で催した。昭和二十年五月二十五日東京で爆死。

○短詩型文学の系譜

北原白秋の高弟選聖歌は「童謡」については師白秋を越えたといわれる。彼は日本の童詩に、空前絶後の清新な作風を作り出した。明治三十八年に生まれ昭和四十八年死亡した。

山口青郁（明治二十五年五月生。工博虚子門）主宰夏草は、始め岩手で宮野小提灯（明治二十八年）昭和四十九年）清水不榎魚（明治二八年）昭和十一年）らが発刊。現在は俳壇有数の雑誌に発展している。

「自然味」は高橋青湖主宰（明治三十二年生）六月で通巻五九五

号。長年に亘っておびただしい門弟を育てた。

「岩手短歌」は、昭和四十九年八月で通巻二〇五号。主宰は森山耕平（大正三年生）二百数十名の会員を擁して岩手県歌壇の中心的雑誌。

岩手県の歌壇は明治・大正・昭和を概観すると、故人関徳彌（尾山篤二郎門）と小田島孤舟（明星・創作系）の二人が指導者であった。孤舟は明治一七年生。昭和三〇年没し、徳彌は明治三十二年生。昭和三十二年亡くなった。二人は多くの門弟に影響を与えた。

現在の中堅歌人は二人の門下生である。孤舟は十数冊の歌集を刊行。書道でも名をなした。孤舟主宰の「曠野」は大正年間から第一次第二次にわたった。

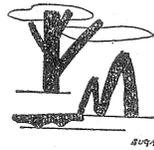
徳彌は「歌と隨筆」「風林」「農民芸術」などを刊行、幅ひろく散文の分野にも活躍した。ことに宮沢賢治と親戚でもあり、賢治について著作が数冊あり、賢治研究者に役立っている。

（詩人・直木賞作家）

人物を中心とした

文化郷土史

—宮城県—



佐々久

一 宮城県の略史

伊達政宗の晩年以來借金財政を続けて仙台藩は明治に至ったので、文事にはやや見るべきものもあつたが、消極政策がとられ、伊達騒動に見られるように内部紛争もあり、事なきを以て幸とする風が見られた。県民性はこの間にできて清貧に甘んじ文事を楽しむのんびり型となつた。

明治維新に際しても財政難で世界情勢はもろろん京都の情勢にも暗く佐幕主義に徹し賊軍の巨頭となつて戊辰の戦に破れ、領地は四分の一にけずられ、大地の侍となつて北海道に移住した者も多い。仙台周辺に残つた武士達も貧困に苦しんだ。

廃藩置県の際、藩の借金は無視され、貸主には破産する者もでき宮城県も以來約百年間災害が多く県債に苦しみ、産業起ころず後進性に甘んぜねばならなかつた。最近十余年来はじめて活気を呈するに至つたのみといえる。

したがって、教育に力をいれたが経済に恵まれず、文芸美術はともすれば沈滞した。学都と称されたが郷土では人は育ちにくく、志ある者は多く故郷を出て勉学した。

明治中年旧制二高ができ、明治末期大学、工專が誕生して去来した文芸人、技術家が多い。これらに刺激されて郷土の文芸も向上しつつあるといえる。しかもなお東京の植民地的傾向が強く、地方独自の文化形成は今後にまたねはなるまい。

二 日本画

仙台藩には幕末藩校養賢堂と医学館があり、文武、外国語、医学が教授された。芸道には別に絵所預りとか画員と称される画家の家があり、御乱舞方、御茶道とよばれる家柄も多かつた。連歌和歌で禄を食む家もあつた。

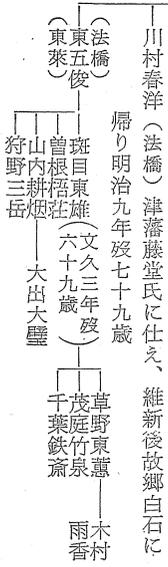
また藩主の分家とも見られる一門など万石以上の武士達は各々学校を置き昌平齋や養賢堂で学んだ者をして教えさせた。

幕末藩の画師であつたのは、荒川晴海、佐久間立德(六所)、深谷勝竹、東五俊(東萊)、繩口雄遠、菊田桂州、菊田伊徳の七人であつた。このうち菊田伊徳は、戊辰の役に戦死し、明治初年なお画筆をとつていたのは、晴海、勝竹、五俊、桂州であつた。

南画家川村雨谷が明治中期仙台台控訴院に來任したとき、藩政末期の菅井梅園、東東洋、菊田伊州、小池曲江を仙台の四大家と稱した。明治年間仙台で活躍したのはこの流れをくむものが多く、しかも四大家と同様に一通り仙台で学んだのも、江戸、京都あるいは長崎に赴いて修業した画家である。

梅園の流れをくんだ画家に佐藤梅南があり、明治十一年六十一歳で歿している。

東東洋の流れに属する主な者は次の通りである。
東東洋—東東寅(法橋—嘉永六年江戸に歿す)。



東五俊(東萊)は家をついだが中年四条派系の父の法をすてて南画を学び、大槻磐溪、油井牧山に詩、書を学びよく弟子を教え明治四年六十五歳で歿した。

曾根梧莊は五俊に学んだ後、長崎にゆき鉄翁に師事して逸雲と並び称されたが、維新の騒動に帰郷を断念して京都に止まって画筆をとつていたが明治七年病歿した(四十二歳)。

山内耕畑は本県の東北部本吉郡入谷の産、東萊に学んだのち、江戸に出て大槻磐溪より経史をうけ、京都の中西耕石について南画を学んだ。さらに九州に渡り広瀬淡窓の塾に寓し、長崎に赴いて逸雲、鉄翁に学んだ。帰仙して勤王の義を奉じ遠藤温(後に宮城県参事、衆議院議員)や岡千仞(鹿門、後東京書籍館長)大條宗亮、佐久間晴岳らと交わり、藩から排斥されて東西に流寓した。

維新後県の叔小鳳となり、一時函館・千島・樺太を遊歴した。画は品よく瀟洒でわずかに設色したものが多い。茂庭竹泉、小西皆雲と共に明治年間の仙台の南画三大家と称されている。明治四十年歿八十歳。

狩野三岳(貯岳)は本吉郡津谷出身で経史に通じ東萊に学んで山水をよくし、明治三十七年七十六歳で歿した。

茂庭竹泉は斑目東雄の弟子で鎌倉時代より名取郡茂庭を領した旧族の出である。東雄に学んだ後京都に上つて貫名海屋、日根野対山に学び、さらに長崎にゆき鉄翁、逸雲に教えを乞うた。また郷里にあって先には磐溪に、後には大須賀鶴軒に詩を学んだ。大正十一年歿、九十歳。

千葉鉄斎は仙台で学んだ後狩野伊川院の設色を学び、また林学齋

に経史を安田老山に南画を学んだ。老山の塾長として止まり南北折衷の独特な絵をかいた。仙台に長く住して巧みに絵をこなし一般人に親しまれた。大正十二年歿八十二歳。

このほか東雄の門人草野東薫に学んだ木村雨香がある。彼は先に四糸派を学び後南宗画を学んだ。宮武外骨は彼を推奨して南画の第一人者と評した。大正元年七十一歳で東京に歿した。

菊田伊州

よね（佐久間晴岳の妻、鉄園の母）

菊田桂州は伊州の嗣子で伊州に見込まれて家をついだ。狩野風の画を伝えたが、晩年は南画風の絵をも画いた。明治三十六年歿、七十六歳。

佐久間立德

晴岳

得樓

鉄園

仙台四大家には入れられなかったが、藩の画員の狩野派に属した家に佐久間家と荒川家があった。佐久間家の祖左京は、政宗が仙台城、瑞巖寺、大崎八幡を建立した際その設色や障壁面に腕を振った画家であり、以来代々画員であった。中頃佐久間河巖は画家と共に儒者としても知られ、「楓巖聞老志」の著書もある。一時画員をはずされたが、立德よりまた画員の列に加わった。元禄頃から代々木挽町狩野家に学ばず習わしであった。佐久間晴岳は立德の子で晴川院にも学び、また菊田伊州にも学びその娘米子を妻とした。米子も父の画風をよくした。晴岳は若くして詩を油井牧山と松井竹山に学び、書を山岸介庵に学んだ。大志あり四方の志士と交わり、幕末政争に関係して一時獄にもつなげられた。のち家居して教授した。画は

鉄梅と交わった。

明治十五年支那に渡り香港、上海の間に遊んで得る所あり、明治十九年帰朝して井上馨、三浦梧楼、岸田吟香の知遇をうけ南画の大家とされた。明治四十二年六十八歳で東京に歿した。

皆雲の記念碑は松島海岸瑞巖寺の傍にあり高橋是清の題字である。

小西皆雲の修業時代明治十五年頃は仙台の人口は約六万であった。この頃東京で開かれた絵画共進会に出品した日本画家は先の晴岳、竹泉、桂州、徳郎、鉄斎、菜圃、鉄園、勝竹の外に受賞した太田霞岳や菊地華樵をはじめ二十一人の多数であった。このほか、書をもつて立ち、南画を残した人が十余人あり、当時の趣好がうかがわれる。

大出大壁（大癖）は山内耕畑に南画を学び、洋画を小山正太郎に学んだ。戦争中に故郷桃生郡河北町に疎開して、昭和二十八年九十一歳で歿した。若い時から写生を試み名所旧蹟を写した。特に松島、耶馬溪、朝鮮金剛山の自然より学んで画を作り、東京にあって南画の雄と目された。

南画の全盛期に設色の四糸派風の画を作ったのは遠藤遠雄である。彼は藩の重臣の家に生まれ、父が京都平野神社宮司となるに従って京にゆき、原在泉に師事し、精密雅麗な画風を学んだ。当時京都の青年画家としては栖鳳につぐ存在であったが、仙台に帰り大正四年五十歳で歿するまで酒を愛し絵をかいた。彼の絵は仙台で今も喜ばれている。

明治年間東京で活躍した仙台出身の画家に武村耕靄と岸浪柳溪が

俗気なく設色するものあり南画風のものあり瑞巖寺の障壁にも彼の画を残している。明治十八年歿、六十七歳。

二子あり出藍の誉ある得樓と鉄園である。

佐久間得樓は多病であったが、大作を残した。父に学んで山水、人物をよくし大いに囑目されたが明治二十三年五十歳で歿した。

弟鉄園は先に狩野派の画をかき後に東西を折衷して秀潤な絵をかいた。特に羅漢をよくかいた。松島瑞巖寺、仙台北山輪王寺などに羅漢の絵を残している。東京に住み帝國技芸員や審査員にあげられ作品も多い。大正十年四月、七十二歳で歿した。墓は鶴見の総持寺にある。「支那歴代名画評」「鉄園画談」の著がある。

荒川洞月

養湖

晴海

蠣崎縉齋

松坂菜圃

（文久三年歿）

小西皆雲

荒川晴海は養湖の子である。養湖は養川院の弟子で、晴海は晴川院に学んだ。晴海の画は漢画風の緻密なものであったが、晩年は破墨山水をもよくした。明治九年六十三歳で歿した。

養湖の弟子蠣崎縉齋は人物、花鳥をよくした。

松坂菜圃は縉齋に学んだ後、長崎に赴いて鉄翁の門に学び、諸氏の長をとって一格をなした。広く四方を漫遊して大いに筆を振った。設色のものに見るべきものが多い。明治四十五年七十七歳で歿した。

小西皆雲は縉齋の学僕となって画をうけた。松島の東方桃生郡上下堤村（今の鳴瀬町内）の産である。のち田崎草雲の従僕となり書画詩文を学んだ。明治二年長崎に鉄翁の教をうけ安田老山や清人胡

ある。

武村耕靄は明治初年横浜で英書を学び、南宗画を山本琴谷、春木南溟にうけ、洋画を川上冬崖に学んだ。山水花鳥をよくし女子高等師範で英語と画を教えた。画で受賞十数回、皇后陛下御前揮毫の栄誉もあった。大正四年六十四歳で鎌倉で歿した。

岸浪柳溪は仙台藩医の子であったが父に従って東京に出て、福島柳圃、田崎草雲に学び南宗画の大家となった。品のよい画が多い。昭和十年八十一歳で東京で歿した。

斎藤弓弦は伊具丸森の出身で小堀軔音の学僕となり、土佐派の筆意を学んだ。文展に数回入選して東京で筆をとっていたが、戦災にあい郷里に帰り数年田畑を耕し、また筆をとり、昭和四十九年九十五歳で歿するまでかいた。

昭和八年以来河北新報社は東北美術展を主催した。昭和九年に日本画の第一位は太田聰雨であり、昭和二十一年の第一位は莊司福であった。現在仙台には美術学校出の中村爽歩、速雄門下の宇野松仙、華樵門下の山下梅遷がある。

このほか仙台に去来した画家も多い。長く在仙したのは仙台幼年学校のフランス語教官として来仙した益頭峻南であり、控所院に職を奉じた川村雨谷である。峻南は野口幽谷の弟子で後に東京で文部省美術展の審査員であった。大正五年六十六歳で東京に歿した。雨谷は逸雲、鉄翁に学んで明治三十九年六十九歳で歿した。

大須賀篤軒は明治年間旧制二高の儒学の教授として在仙した。数は少ないが緻密な設色の謹直人をうつつ画を残した。

三 書道

幕末御家流にあき足らずとした仙台藩の儒者も唐様を学び、この風は明治初期に及んだ。

明治天皇が明治十四年東北に巡幸されたとき御前揮毫をしたのは八十一歳の千葉三余であった。

彼は幕末藩の書家石川基剛（持明院流）や藩本流の阿部椿園から学び、晩年唐代の孫過庭や張旭の草書を習って一格をなした。

藩校養賢堂には書の教授が居り武士も町家も書はだれしもがよく習った。従って、書道の師家には門弟が多く集まり、小学校の開かれた後も書は主要課目であった。

いわゆる書家と目された人々は多い。三余と並び称されたのは石川基剛の孫女鶴寿女であり、ついで金華山宮司であった佐々木巴溪である。

明治十四年来仙した控所院長西岡愈明（宣軒）や第二師団の法務官岡元碧巖も書をよくし、当時愈明はよく書画の会を開いて清遊を樂しみ書画愛好家がふえた。

唐様も次第に宋元から隋唐さらに六朝風とさかのぼり、特に清人楊守敬が万余の碑帖を持参して、来朝以来さらに古代の漢魏六朝之書体が好まれた。巻菱湖、市河米庵の流が盛んに行われていたところへ六朝風がはじまり、松田雪柯、巖谷一六、日下部鳴鶴は楊守敬に師事した。

中林栢竹は米庵門下の山内香雪の弟子であるが、支那に渡り楊守敬の師の藩存に師事して帰朝した。六朝風は鼓吹されたが唐様はな

四 洋画と彫刻

明治十四年高橋由一が三島通庸県令に招かれて山形県に來た帰途、宮城県令松平正直は彼を仙台に迎えて県庁と松島の画を依頼した。今県図書館所蔵のものである。

高橋勝蔵は万延元年亶理郡に生まれた。高橋由一の來仙に刺激されたのか、明治十八年渡米しサンフランシスコの学校に六年在学し、ヘンリーゲーツマセウス・エーランド等に学び、シカゴにゆきソッサマン、ランヂス等について学び、明治二十六年帰朝し、劇場の背景画の改良に努めた。また芝公園に芝山研究所を開いて後進を教えた。文展には第三、四回に静物を出品している。大正六年五十七歳で歿した。

明治二十年代に洋画に志した者に大田霞岳の子可一があり、布施淡がある。布施淡は小山正太郎に学んで帰郷し東北学院と宮城女学校で教えた。彼は島崎藤村と親交があり、一時藤村は彼の家に寄寓していた。彼の家は仙台藩の有力な武士であった。おしむらくは明治三十四年二十九歳で歿した。

その遺児は即ち故布施信太郎（中村不折門下帝展無鑑査で太平洋美術校の教授）と同僚次郎（現太平洋美術委、評議員）である。

東京美術学校で学び、岡田三郎助に師事した佐々木節郎は画塾を開いて後進を導いたが、昭和十八年大陸で五十歳で客死した。彼とほぼ時を同じくして画塾を開いて後進を導いた人に渋谷栄太郎がある。戦争は色々の意味でその前途をかえた。中野和高は牧師の子で美術学校を卒業後、フランスに留学し本県出身のホープであったが

お依然として教科書とされて大正に及んだ。

この大勢は宮城県にもそのまま反映した。中林栢竹は明治三十年頃來仙して滞在し、県内各地に迎えられ、知事勝岡田稔も墨客を集めて清遊している。巖谷一六、高橋泥州も折々來仙した。

佐々木巴溪（通称舜永）は書を平井東園にうけ、画を斑目東雄に学んだ。国典。仏典に通じ戊辰戦争に活躍した。家は修験であったので屏居して書をきわめ、明治七年復歸して神官となる。職にある五十年、この間全焼した金華山の社殿を復興し八十歳にて退隱した。孫過庭、歐陽詢、賀知章を学んだ。東北の碑板約五千は巴溪の書と伝えられる。昭和六年九十一歳で仙台に歿した。

佐々木巴溪はその長子で鳴鶴と一六に師事し大いに囑目されたが、昭和三年父に先だつて東京に歿した。年六十歳。

栢竹の流れをくんだ武田天民は岩沼の人である。

しかし、仙台地方の書家は中目竹堂、大須賀錡軒、武田文太夫、四釜静堂、佐藤五橋など唐様を主とし、歐陽詢、褚遂良、顔真卿、智永などの唐代書体を学び、また弟子たちに教えた。大正末東北大学に法文学部ができると青木正児は支那書道史を講義し、教授の中にも能書家があった。武内義雄、総長井上仁吉、工學部長宮城音五郎など何れも唐様であった。

六朝風も昭和十年頃から全国的に盛んとなり工學部の有井癸巳雄（凌雲）が中心となつて戦後に及んでいる。

戦後時代をさかのぼつた金石文字から象形文字が仙台でも流行している。

先年歿した。

現在仙台には杉村悳、沼倉正見、菅野謙、佐藤多都雄、渋谷等の画家がある。最近物故した大宮司正一は黙々と弟子を教え、一度も個展も開かず売りもせず真面目な絵を残した。

水彩画は広く長く中学校、高等学校で授業として行われ、美校出の人々が教壇で教えた。旧制二高の絵の講師野村辰雄は長年水彩画を帝展に出品した。

水彩画も洋画も戦後愛好家が多くなり、かく人も多くなった。

彫刻は建築裝飾や仏像・置物など実用品として作られたので、明治初年には宮大工の手になったものが多かった。

翁金六はこの宮大工で金華山神社社殿の彫刻はその手になったという。

翁朝盛は明治三十九年金六の子に生まれ、山崎朝雲に師事し木彫をよくしブロンズも作った。特に木彫は錦彫を創始した。文展無鑑査であった。先年歿したが、その子女たちが父の遺志をついで活躍している。

小室達は白石中学校、東京美術校を卒業朝倉文夫に師事し、元主線美術協会員で院展、日展等で特選、招待、依頼をうけ仙台藩祖政宗像をはじめ、伊澤平左エ門胸像など仙台に作品が多い。昭和二十八年五十五歳で歿した。

現在本県生まれに佐藤忠良、阿部正基、佐藤允了が東京にいる。

五 国学と和歌

大槻碧溪は幕末開国論を支持した。戊辰戦争の後明治二年戦犯と

川柳には三十五年七十一歳で歿した鶏肉屋の主人浜夢助があり、その努力により同人が多くなった。

七 詩文小説

松居松葉は明治三年仙台生まれ、祖父は群馬県間々田の人で来仙して藩の財用方となった。父は維新後茶畑を経営したが、失敗して呉服屋となる。松葉は明治十三年宮城中学校に入學したが、父の病歿によって商業をつぎ巖谷一六に看板を書かせるなど経営に尽力したが失敗して上京、苦学して国民英学舎を卒業した坪内逍遙の知遇をえて早稲田文学の編輯に当たり、新聞記者となって劇評につとめ齋藤秀三郎とも交わった。また市川団十郎の知遇をうけた。初代市川団十郎が本県多賀城市市川村の出なりという説を立てた。

明治二十年頃新島襄の同志社の分校東華学校が仙台にできた。郷土の先輩日銀總裁富田鉄之助と松平正直県知事の尽力によるものであった。同志社に学んだ郷土の先輩に水沢出身の山崎為徳がある。彼は明治十二年同志社を卒業、二十三歳で教授にあげられ教育と伝導につとめ、新島襄の後継者と目された。同窓には海老名弾正、森田久万人、市原盛宏、浮田和民、横井時雄等がいた。為徳の弟子には大西祝、原田助、綱島佳吉、徳富蘇峯がある。おしむらくは明治十四年秋二十五歳で歿した。東華学校の校長には市島盛宏が来仙した。新島襄も開校式に来仙した。やがてディフォレストも大工道具まで持参して開拓地のつもりで来仙した。

この学校は六年で閉鎖されたが学んだ人々には学習院長海軍大將山梨勝之進、貴族院議員長田所美治、河北新報創業者一力徳次郎、



秋風五丈原などの新体詩は若人に愛唱された。晩翠は昭和九年まで母校で英語を教え、昭和二十七年八十一歳で晩翠草堂で歿した。

井土 晩翠の二高学生時代は仙台には儒者で詩人の国分平台には儒者で詩人の国分平台は、漢詩人が多かった。彼の二年後輩に久保天随も学んでいた。また仙台出身の漢学者岡鹿門や漢詩人国分青厓は東京で活躍していた。鹿門は博覧強記詩文をかね私塾を開いて教えていた。青厓、尾崎紅葉も塾生であった。

青厓は日清戦争の際、山縣大將(号含雪)に従って遼東の戦を賦し、評林体一派をはじめ速作多作で国土的詩作が多い。雅文会の顧問で、昭和十二年芸術院会員となる。弟子に土屋竹雨、鈴木豹軒等がある。

吉野臥城は伊具郡角田の生まれで晩翠の新体詩が流行していた頃長詩をよくした。小百合集、野茨集を出し明治四十一年明治詩集を世に出版した。東京にあって宮城県人を発行し、県人の消息を知らせていたが大正十五年五十一歳で歿した。

真山青果は仙台の小学校校長真山寛の子である。宮城県尋常中学校から上京して日本中学に転校、明治三十九年第二高等学校医学部に入学した。医者代診となつて南小泉村をまわった。後の「南小泉村」はかくして生まれた。青果は医者を志すのをやめて上京し芦花の門に入らんとし成らず、佐藤紅緑の家に数年おり、二十八歳で小栗風葉の門下となつた。彼は荒けすりの歌筆、細かい観察で小説をかいた。明治四十四年文壇を退いて松竹の脚本部に入り、脚本劇

真山青果、児玉花外などがあつた。

山梨大將は「市原さんは晩年、一生のうちで東華学校を閉鎖したのは間違ひであつた。学校は決してつぶすものではない、と言つていられた。終戦後学習院の閉鎖問題がでたとき、私は市原先生の言を思い出し、閉校せずにすんだよ」と語られた。東華学校閉鎖のあとに宮城県尋常中学校ができた。真山青果は丁度この過渡期の生徒であつた。

高山樗牛(林次郎)は第二高等中学校本科(二高前身)明治二十五年の卒業で井上準之助と同年である。一年上には田所美治、新城新蔵がおり、一年下には土井林吉がいた。この頃仙台出身の齋藤秀三郎は英語の講師であつた。

樗牛は明治二十九年東京帝大を卒業すると直ちに同級の佐々暉雪と共に二高教授に招かれ、行を共にして来仙した。当時東北学院には島崎藤村がいた。東大生であつた晩翠が帰郷するとこれら四人はこもごも交わる機会を得た。しかし樗牛は一年で仙台を去つた。

明治三十年河北新報が発刊されたとき醒雪も藤村も文をよせている。この頃はミッションスクールが仙台に多くできて来仙の外国宣教師の学生への感化も大きかつた。尚絅女学校長ハプテスト派の宣教師ミス、アンネー・ブゼルやディフォレストはその最たるものであつた。少年文学の作者押川春浪の父方義も明治三十四年まで東北学院長であつた。

土井晩翠は明治四年仙台生まれ、二高、東京帝大を卒業して郁文館中学に勤務した。明治三十二年二十八歳の時、「天地有情」を出版し、この年郷土の母校旧制二高に迎えられた。荒城の月、星落



作に当たつた。大正十三年また文壇に復帰して戯曲をかき学問的考証に当たつた。昭和二十三年七十二歳で歿した。

真山青果 仙台からは小説家が出なかつた。志賀直哉は白石で生まれ、南部修太郎が仙台で生まれたという縁があるくらいのものである。

前田河広一郎は異色の作家であつた。明治二十一年仙台に生まれ仙台一中を半途退学し、十九歳の時渡米し、色々の職業をして十三年目に帰朝し雑誌「中外」を編輯、短編小説や翻訳、評論など社会問題を取り扱つたものが多い。有産階級に挑戦的態度をとる急進派作家と評された。昭和三十二年歿、六十九歳。

柴田勝衛は仙台出身で青山学院卒業後、外人経営の教文館につとめ上山草人、伊庭孝、松村敏男と近代劇協会を起し、新劇運動に志した。大正初年時事新聞記者となり翻訳小説をかいた。大正九年読売新聞に移り文芸欄に千葉亀雄と文芸異邦巡礼を連載して知られた。

近年本県出身にも作家、評論家を志す人が多くなつた。今後に期待したい。なお軟文学の舟橋聖一も仙台生まれである。病氣のため終始仙台にいて歴史小説を書いた。大池忠雄(明治四十一年生、本名小池忠雄)も努力した作家であつたが先年歿した。文筆家は一朝一夕に生まれるものでないことをつくづく感ずる。

(宮城県文化財調査委員 財団法人仙台美術館長)

人物を中心とした

文化郷土史

— 秋 田 県 —

伊多波 英夫



明治二十八年の浅春、十九歳の佐藤儀助青年はひとり東京の人となって巷を彷徨していた。新聞・牛乳の配達人から、やっと印刷工の職にありつくが、日給十五銭では三度の食事がやっとなら、いつも腹をすかしながら、最も重労働の腕車を回す、いわば動力がわりになって働くことになる。

彼の生まれた角館は佐竹北家の城下で、初代の殿様義隆が高倉大納言家から養子に入ったせいもあり、京風の雅びな伝統を持つ、学問や芸術を愛好する気風の旺盛した土地であった。だから、荒物屋のせがれの彼も、師範学校進学を志し、秋田へ出てまず積善学舎に入った。

折しも日清戦争が始まる。彼は愛読していた投書雑誌『筆戦場』で、競って戦地へ赴いた名のある記者や作家たちが興奮もあらわに書き送って寄越す従軍記に胸をおどらせ、筆一本で読む者の心をおくも駆立てる文士という職業の魅力のとりこになってしまった。他の友人二人を誘って故郷を捨てて来たのだが、最後まで東京に踏みとどまったのは儀助一人であった。

東京で彼は田沼漢雲主宰の『青年文』の愛読者となった。頼山陽の詩について述べた投稿が同誌に掲載され、それが上司の目にとまったのが幸いして、彼は日給倍額の校正係に抜擢される。日夜、文豪大家といわれる人々の肉筆原稿に接して、彼の文学熱はつもの一方だった。ついには自分の力で雑誌を出すことを夢み、そのためには食事を抜いてまで節儉を心掛けた。その熱意に同情したのが下宿先の奥さんで、へそくりをこっそり資金として儀助に貸し与えてくれた。



亮 義 藤 佐

青年が初めて上京して、僅に一年半目のことであった。明治二十九年七月十日、こうして投書雑誌『新声』は誕生する。この儀助青年こそ誰であろう、日本の近代文学の発展に多大の貢献をしてきた新潮社の創始者、佐藤義亮（一八七八—一九五一）その人の若き日の姿にほかならない。

創刊号八百部はすぐに売切れた。三号から彼は佐藤橘香の名でコラム『文界小観』を書き、臆せず到大家連を批判のやり玉にあげた。やがて熱心な投書家の一人高須梅彦を記者に採用、さらに竜子夫人の弟中根駒十郎を編輯に据えて、新声社の基礎は固まった。「文章講義録」の企画で大ヒット、日本初の社会主義論文集といわれる「横雲掃吏」などの単行本も出した。絶頂期には、与謝野鉄幹・晶子夫妻を誹謗する怪文書の『文壇照魔鏡』事件で裁判沙汰をひきおこすが、のちハアカツキ叢書で意欲的に新思想の文学を天下に紹介、とくに「雲右衛門の最後」で田山花袋を文壇にデビューさせた功績が評価されている。

三十六年秋、新声社は経営に失敗して他人の手に渡る。しかし、不死鳥の如くよみがえった義亮は、翌年五月には新しく『新声』をおこした。そして今日になお続く、最高長寿の文学雑誌として成長の歩み続けることになる。

『新声』創刊号の表紙を描いているのが平塚百穂。また巻頭には田口掬訂の「鉄火と詞草と—何故に戦争文学を鼓吹するか」の一文を掲げ、続いて伊藤銀月の「痛快主義」と、共に秋田県人の文章が並んでいる。掬訂と百穂は、義亮と同じ角館の生まれである。二人は連れだって明治三十三年の夏に上京してきていたのである。

田口掬訂（一八七五—一九四三）は、最初義亮を頼って新声記者となるが、金澤堂の懸賞小説に「人の罪」の当選したのを奇貨に、三十五年には大阪毎日に「新生涯」の連載をはじめるといふスピード出世で文壇の仲間入りをした。「機動演習」「片瀬川」などの好短篇を書いたが、新声社解散後は黒岩涙香の万朝報に移って、鏡花・幽芳の系列につながる家庭小説の名作といわれる「女夫波」や「伯爵夫人」を同紙に連載した翻訳や戯曲にも手を染めている。晩年は美術評論に向かい、さらに中央美術社をおこして「日本風俗大系」や「妖怪全集」などを出版した。

掬訂の子が淡谷のり子とのロマンスを噂された洋画家田口省吾（一八九七—一九三三）で、孫の高井有一（一九三二—）は、父祖の地角館を舞台に、母の自殺を主題とした「北の河」で芥川賞を獲得した。戦中は角館に疎開、中学の恩師で民俗学者武藤鉄城をモデルに長篇「雪の涯の風葬」も書いている。

伊藤銀月（秋田・一八七二—一九三四）も、数奇な青年時代の人生行路を経て、その頃は万朝報の記者だった。小説・随筆・紀行から独特な発想による歴史物語、軽妙にして真髓を衝いた人物評論、はては文章致篤、旅行案内書・健康法、そして最も話題となった「忍術極意秘伝書」にいたるまで天衣無縫に書きまくって、百冊近

い本を著したこの不思議な作家の多彩な才能と行動力とは、一般に鈍重で粘着型と信じられていた秋田県人の性格からケタ外れに逸脱しており、その異色な生涯と思想は今後の考究に値いしよう。

出版界の巨人たち

秋田の文学界を概観して特徴物といえるのは、出版方面に多く逸材を生んでいることである。そして、冒頭に例をあげた佐藤義亮の『新声』『新潮』にみるように、後に続く県人が先輩出版人のひきを得、その雑誌を拠点としたり、あるいは相互に扶助し合って文壇に地位を占めていった事実を見逃すことはできない。

なかで際立つ存在は、不世出の編集者の名をほしきままに、『中央公論』中興の人といわれる滝田樞陰（秋田・一八八二～一九二五）であろう。西本願寺派青年僧の機関誌『反省会雑誌』にはじまり、現存する総合雑誌として最も古い沿革をもつ同誌でさえ、大学時代にアルバイトで海外新潮V欄の翻訳を手伝ったのが縁で、国民新聞から樞陰が中公記者に迎えられた当時は、片々たる小雑誌にすぎなかった。



滝田樞陰

樞陰は「猫」でやっと文名の出始めた夏目漱石を起用したのをはじめ、露伴、荷風らの大家を動員して芸芸欄の充実につとめ、そこを文壇登竜門として

谷崎潤一郎、志賀直哉、武者小路実篤らを輩立させた。これと並行、新婦朝者吉野作造にも積極的の書かせ、大正デモクラシーの牙城として思想界の支持を得たことも、同誌の地位を確固不拔のものとした。滝田樞陰もまた、若き日は『新声』の投書家であった。

このほかフランス文学と演劇書が専門の白水社の創始者福岡易之助（雄物川・一八八五～一九一四）は、太宰施門、内藤瀧ら東大仏文の同期生らと共同で「模範仏和辞典」を編さん、そのために私財を投げうったが、その功績でレジオン・ドヌール勲章を授けられている。光太郎の「智慧子抄」や竹久夢二ものの出版で知られる竜星閣主人沢田伴四郎（小坂）は、限定本マニアの書痴仲間にとり神様のような存在。こうした出版人の伝統は、最近野坂昭如の共同被告として八四疊半襖の下張りV裁判で新聞の社会種をにぎわしている『面白半分』の佐藤嘉尚（秋田）にまでつながっている。

大杉栄をして「新しい意味における自由民権の寺小屋」と賞讃せしめた『第三帝國』を、幾多の苦難とたたかいたながら、最後に矢つきるまで百号以上続けた石田望夫（秋田・一八八一～一九四二）のことも、出版人というか思想運動家として忘れてはなるまい。「ルバイヤット」の詩人堀井梁歩（秋田・一八八七～一九五八）やトルストイアンで文芸評論家の西宮藤朝（角館・一八九一～一九七〇）ら県人の多くが活動の場をここに求めて、のち『種蒔く人』を創刊した金子洋文（秋田・一八九四）は、郷里で代用教員をしていた無名時代、同誌の投書欄△戦聞曲Vで筆鋒を磨いている。

小杉天外と後藤宙外

幕末の慶応年間、仙北平野の隣り合う村で、一年を相前後して生まれているのが、小杉天外と後藤宙外の両文豪である。二人とも東京遊学の動機は政治家志望で、短期間ながら同じ下宿で机を並べたという因縁でも結ばれる。

小杉天外（六郷・一八六五～一九五二）は、正直正太夫こと齋藤緑雨にひろわれ明治二十五年に処女作「酔骨録」など三篇を収めた「反故袋」でデビューした。三十年代には「蛇いちご」「初すがた」「はやり唄」などの諸作で、和製ゾラと称され、これが花袋や藤村に影響を与えて自然主義文学の先駆者といわれた。しかし、三十六年に読売新聞に連載した「魔風恋風」が当時のインテリ階級、ことに学生風俗をうつつしたものととして大好評をよび、これを境目に以後は大衆文学畑を歩むことになる。昭和の戦後まで、驚くべきほど長い作家生命を保った。

いっぽう後藤宙外（仙北・一八六六～一九三八）は、早稲田在学中に書いた「塵の身」が処女作で、ほかに「ありのすまび」「闇のうつつ」や政治小説「腐肉団」がある。しかし、美妙・紅葉・露伴の三作家を論じた卒論で坪内逍遙に才能を見出されたように、後半生は評論家、編集者としてむしろ文壇的には知られる。編集者としては卒業と同時に『早稲田文学』が振り出しで、のち郷里の地主小西平州をパトロンに、抱月、天外らと『新著月刊』を創刊した。さらに当時の三大誌の一つ『新小説』の編集主任として新人発掘につくした功績が大きい。



後藤宙外

長年にわたった文壇の裏方体験から、昭和十二年に発表した「明治文壇回顧録」は、近代文学の研究家にとっては欠かせない特級資料とされている。宙外が評論集「非自然主義」を世に問い、天外とは逆の自然主義反対の立場をとったのは皮肉なめぐり合せといえよう。晩年は秋田時事新聞の社長に就任して、社会主義詩人の児玉花外や山田枯柳らを記者として秋田に迎えたが、経営不如意のためほどなく郷里に近い六郷町に退隠、町長を勤めたり、主として郷土史の研究と著述（弘田柵跡の発掘で功勞があった）で余生を送った。

狩野亨吉と内藤湖南

県北は、佐竹西家の城下大館を中心に、狩野、江幡、塩谷、中田、館といった漢学者群を輩出した土地柄である。狩野・江幡の両氏から、地方紙としては全国で二番目に古い歴史を持つという秋田魁新報の初代（狩野旭峰）と二代（江幡膳園）の編集長が出ていることは特筆してもいいだろう。秋田魁紙の前身は、県の広報紙的性格をもった週報新聞で、これがちょうど百年前の創刊。署名編集人として中央から迎えられた鳥山葉三は、のち関西で新聞小説界の第一人者といわれた宇田川文海である。この魁紙が秋田日報と称して

いた時代、木堂犬養毅青年が主筆としていたこともある。

狩野氏には、松下村塾から板行した「三策」で日本の鎮国政策を批判した狩野貞知（旭峰の兄）と次男で一高校長の狩野亨吉（一八六五～一九四二）がある。亨吉は漱石の「猫」の主人公苦沙弥先生のモデルに擬される。文学と理学の二つの学位を持ちながら、死後に門弟安倍能成らの手で編まれた「狩野亨吉遺文集」わずか一冊しか著書を残さず、晩年は書画の鑑定で口を糊しながら市井に韜晦の生活を送ったが、暮末の農本思想家安藤昌益（秋田藩の医師の子といわれる）を発見した一事だけで、彼の功績は永遠に光を失うことがないだろう。

県北でも岩手寄りの鹿角地方は、戊辰戦争では秋田藩と激戦を交えた南部藩の領で、維新後の割譲地である。花輪、毛馬内の両城下町からは、「我幻の魚を見たり」の和井内貞行、犬養内閣の法相川村竹治、滝川事件に連袂して京大を去った行政学の田村徳治、電気銅製錬法を発明した石田八弥とその長男で文化人類学の石田英一郎ら、多くのすぐれた人材が出ているが、一頭地を抜いて巨峰と仰がれるのは中国史学の内藤湖南（一八六六～一九三四）である。秋田師範卒だけの学歴、しかも大阪朝日記者という在野の彼を京大教授に抜擢した具限の士が、当時京大文科大学長の狩野亨吉であった。全十四巻に及ぶ個人全集を有する此人は湖南をおいてなく、「近世文学史論」「日本文化研究」「支那史」「支那絵画史」などが代表的な著作である。

ほかに人文系の学者には、古今を通じ易経研究の第一人者といわれる根本通明（西仙北・一八二二～一九〇六）、東洋史・易学・万

フランス帰りの小牧近江（一八九四～）がバルビュスの『クララテ』にならって思想活動を始めようと、今野賢三、金子洋文と語らって出した雑誌で、八土蘭版は三号で休刊となったが、同年秋に東京で新たな同人を加えて復活し、二十三号まで続いた。小牧は日本に初めて「第三インター」を紹介した人物でもある。

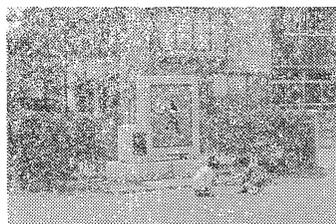
今野賢三（一八九三～一九六八）はプロ作家として好短篇「火事の夜まで」や自伝的長篇「暁」三部作を書き、大半は郷里で活動して「秋田県労働運動史」や「港物語」「秋田市の今昔」など郷土研究の労作も残している。金子洋文は劇作に飛び込んで「飛ぶ唄」「牝鶏」などの佳篇があり、現在も演出家として劣えをみせていない。

しかし『種蒔く人』にさきがけるプロレタリア文学の先駆的な存在として、近年若い研究者によって照明の当てられているのは『火鞭』で、この創刊同人だった安成貞雄（阿仁・一八八五～一九二四）は、のちに弟で八豊葦原瑞穂園に生れ来て米が食へぬとは嘘のような話で著名な生活派の歌人安成二郎（一八八六～）と、『白樺』とともに大正文学史にエポックを画した雑誌『近代思想』にも加わって、社会主義派の文芸評論家として活躍した。ほかには海外文学の紹介に対する功績が認められる。

このように、社会主義文学の先駆者を生み出した秋田の風土は、ついに世界のプロ文学史上に不滅の名を刻まれる小林多喜二（大館・一九〇三～一九三三）を生むにいたる。生家の没落から五歳で北海道に渡り小樽が彼の第二の故郷となるが貧農の娘として育った母の横顔と生地を、その人の思い出話をたよりに「故郷の

葉集の該博な知識を知られた長井金風（大館・一八六八～一九二六）、ゲーテ研究の木村謹治（五城目・一八八九～一九四八）、永井荷風の次に「三田文学」編集主幹となった西洋美術史の沢木四方吉（男鹿・一八八六～一九三〇）、河北新報主筆で「仙台戊辰史」「日本先住民族史」を著した藤原相之助（田沢湖・一八六七～一九四七）、グライ・ラマ十三世と親交のあったチベット仏教学の多田等観（秋田・一八九四～一九六七）がある。

また自然科学や医学畑では、TYK無線電話の発明者鳥潟右一（大館・一八八三～一九二二）とコクチゲンの発見者で肺外科の向上につくした鳥潟隆三（大館・一八七七～一九四四）はいとこ同士だし、赤痢菌や鼠咬症スベロヘータの発見で細菌学の泰斗といわれた文化勲章の二本誠三（秋田・一八七三～一九〇八）、耐震構造の研究で学士院恩賜賞を得た物部長穂（協和・一八八八～一九四一）らの名があげられよう。



「種蒔く人」顕彰館（秋田市土崎の公民館庭）

プロレタリア文学の系譜 日本におけるプロレタリア文学運動の嚆矢は、雑誌「種蒔く人」というのが定説とされるが、それが大正十年冬、秋田市土崎港で三人の小学校同期生の手によって創刊されたことを、秋田の人々はどれだけ誇りに感じているであろうか。

顔」で描いている。治安維持法の毒牙にかり三十歳の若い命を敢えなく散らしたが、その短い青春の間に魂の叫びとして書き綴った文字は全集十二巻に編まれ、なかでも「不在地主」「蟹工船」「党生活者」「一九二八年三月五日」などは、労働者文学のバイブルとして読み続けられている。

とくに資本収奪のきびしかった荒川鉦山で鉦夫長屋に育った体験をもとに「おりん口伝」正統を書いて田村俊子賞を得た松田解子（協和・一九〇四）は、党員作家の立場を貫きとおしており、疎開生活が長く、戦後の地方文学活動にも深くかわりをもった伊藤永之介（秋田・一九〇三～一九五九）も、初期は『文芸戦線』でプロレタリア小説を何本も書いた。

しかし永之介は、「鶯」で第二回新潮文学賞をもらったあとには「農」「鴉」などの鳥ものをはじめ「馬」「牛」「熊」さらには「蛙」「鴨と鮎」といった動物を題名とした一連の短篇シリーズで農民文学に新しい境地を開き、戦後は「警察日記」で農村人の純朴さを描いて好評を博した。

反面、芸術派の代表は、坂口安吾との恋愛が取沙汰された矢田淳世子（五城目・一九〇七～一九四四）で、第三回の芥川賞を本票に疎開していたことのある鶴田知也の「コンヤマイン記」と争って敗れた「神楽坂」など女流らしい繊細な感覚で心理の深奥を衝く作品を残しながら三十五歳の若さで他界したのは惜しまれる。

南米移民者を描いた「蒼氓」で第一回芥川賞を受賞、「生きていく兵隊」では反戦文学として薬師の刑をくい、戦後は教師と教育の問題を扱った「人間の壁」で社会派NO1といわれる石川達三

(鹿角・一九〇五)が現役作家では高峰に位置する。「馬淵川」の渡辺喜恵子(鷹巢)と在住作家で「虜愁記」の千葉治平(田沢湖)の両直木賞作家に、受賞後さしたる問題作のないのは寂しいが、直木賞候補四回という阿部牧郎(鹿角)、一途に土俗の世界を追求して芥川賞候補二回ランクの加藤富夫(湯沢)ら新しい才能にむしる期待がかけられている。

石井露月と「俳星」

「言葉」というハンディを背負いながら、県出身者に演劇畑の人の比較的多いのは面白い傾向といえる筆頭は小山内薫門下で「門を毀つ」「殉死」ら三十数篇の戯曲を書いた水木京木(横手・一八九五〜一九四八)で『三田文学』の編集長もつとめた。女優七尾伶子はその遺児。新劇から新派、舞踊劇、映画脚本と多岐な分野で筆をふるった八木隆一郎(能代・一九〇六〜一九六五)、劇作派に属した伊賀山昌三(能代・一九〇三〜一九五六)がそれで、現役では「法隆寺」で読売演劇賞を受賞した青江舜二郎(秋田)、社会派の本田英郎(小坂)、歌舞伎研究の野口達一(秋田)がおり、演出家としては文化座の主宰者だった佐々木隆(秋田・一九〇九〜一九六七)と人形劇団ブーラの川尻泰司(秋田・父は万朝報記者の川尻東馬)がいる。ちなみに言えば、映画監督には無声時代からの辻吉朗(大森・代表作は「傘張剣法」「海援隊」)が古く、昭和に入ってからは喜劇の神様斎藤寅次郎(矢島)、「旗本退屈男」の佐々木康(雄物川)、警視庁シリーズの伊賀山正光(秋田)らの名前を拾うことができる。

美術界の人たち

八代藩主佐竹義政は、曙山と号し西洋風の絵をよくした。これがすなわち美術史上にいわれる、秋田蘭画で、平賀源内に手ほどきを受けた角館在勤の武士小田野直武(一七四九〜一七八〇)が曙山に教えたといわれている。

またしても角館の文教的な風土が語られるが、明治十七年、フランスにおける日本美術展に「鷲図」を出品、のち東洋絵画共進会の審査員となった平福穂庵(一八四四〜一八九〇)も直武と同じ角館人。父の文浪(本業は染物屋)とともに竹村文海について幼時から絵を学び、神童の才をうたわれた。

たった四か月だが、穂庵の画塾に籍をおいた寺崎広業(秋田・一八六六〜一九一九)は、明治二十三年の第三回内閣勸業博で、日光の舞楽をテーマの「東遊図」が銅賞に入って画壇にデビュー(このとき前年死去した穂庵の絶筆「乳虎図」が銀賞、能代生まれで穂庵門の岡田琴湖の「東浪瀾瀑」が銅賞で県人は大当り)した。東京美術校助教授となるが、岡倉天心校長の排斥騒動に殉じて辞職してから、橋本雅邦やその内弟横山大観らと日本美術院を結成し創作に打ち込む。代表作に「千紫万紅」「高山清秋」がある。のち再び迎えられる死の前年まで十六年間美術校教授をつとめ、帝室技芸員にも推された。

もう一人の帝室技芸員、美術教授が穂庵の四男平福百穂(一八七七〜一九三三)である。川端玉章に学び、結城素明と知って、无声会の最年少会員となる。放浪時代は佐藤義亮の『新声』『新潮』で

文学活動ではないが、成田忠久(八竜・一八九七〜一九六〇)、佐々木昂(岩城・一九〇六〜一九四四)ら教師グループによって始められた生活綴り方運動の『北方教育』が、昭和初期に全国の教育界に及ぼした影響も見落してはならないことだし、それはまた『種蒔く人』と並んで、秋田の文化風土を集約し、象徴するものでもある。教育界では、大正期に八大教育主張の一人、「一切衝動皆満足」論と創造教育論の千葉命吉(湯沢・一八八七〜一九五九)もある。

県北の港町能代で明治三十三年に創められ今日になお命脈を保つ俳誌『俳星』は、大正期までは全国四大句誌に指を屈せられていた。主宰者は島田五空(一八七五〜一九二八)、その影と形が添うように、かつて「日本新聞」にあり子規から南瓜道人の称で愛された石井露月(雄和・一八七三〜一九二八)がいた。病を得て帰郷、秋田市郊外で村医者の生活を送り、子規の再々の要請にも上京を肯んじなかった露月の草庵を訪ねて、碧梧桐や虚子らがるるるる雄物川に沿った野良の道に杖をひいている。

県俳壇のもう一つの山脈を「俳星」に先立ち、「露すり」創刊した安藤和風(秋田・一八六六〜一九三六)がまたちづく。秋田魁新報の主筆・社長として長く、紙面を積極的に文化欄にさいて、地方文化の発展につくした先覚でもある。関西の俳誌「同人」を長く主宰した青木月斗門下の菅裸馬(雄勝・一八八三〜一九七一)のもう一つの顔が、石炭庁長官、東京電力会長、原子力会議議長を歴任したエネルギー界の巨頭菅礼之助であることを付記しておく。

表紙や挿絵を描いて糊口をしるぎ、一時は左翼にかぶられて小川芋銭と一緒に平民新聞にコマ絵を描いた。週刊平民新聞の創刊号からマルクスやジョレスなど世界の社会主義指導者の肖像を連載し、これが六枚一組の絵葉書として売られたこともある。文展特選の「予譲」のほか「田沼湖伝説」「牛」「堅田の休」などの傑作を残した。素明を通じて伊藤左千夫と知り、茂吉らのアララギ派で歌人としても一家を成した。歌集「寒竹」がある。

ほかに中国・朝鮮の古墳や古建築の壁画、彫刻、工芸品などの文様を、一つ一つ模写しながら研究、文様史に多大の功績を残した小場恒吉(秋田・一八七八〜一九〇〇)は、第一回学士院恩賜賞に輝く美術教授。模写といえば法隆寺金堂の壁画の模写に生涯を捧げつくした鈴木空如(太田・一八七三〜一九四六)もいた。

美術教授で服飾学・意匠学の斎藤佳三(矢島・一八九四〜一九五五)は帝國ホテルのインテリアを担当した。いわば工芸デザイナーの草分けの人物であり、戦事中の国民服はこの人の考案。初め音楽学校に入り作曲と二刀流、三木露月の「ふるさと」の曲が有名だ。郷里の一所に腰をどっかと据えて、ひたすら秋田の風俗と風景を彫り続け、海外の展覧会に数々の賞歴を持つほか、西独ケルンの博物館に四十点をおさめている版画家勝平得之(秋田・一九〇四〜一九七一)も、秋田の美術を語るときには逸すことができない。

絵画の新しいところでは、たえず画壇の権威に反逆しながら日本画革新の道を歩み続けた福田豊四郎(小坂・一八九四〜一九七〇)がある。毎日美術賞受賞の武蔵野美大教授だった。洋画では三十九歳で輪転したが、抽象画の明日をになう鬼才と囁きされていた広幡

憲(中仙・一九二一〜一九四八)。放浪時代の藤田嗣治と秋田で知り、戦後再建第一回の二科展で特賞、翌年は無鑑査という破格の待遇を受けながら、もっと純粹な抽象の世界を究めるためにと自由美術に移る。そしてその年秋の同展でキラメクばかりの才能の開花が全面壇人を矚目させたが、その直後に逝く。

書道界は、比田井天来に「地方三筆の一人」といわれた赤星鑑城(秋田・一八五七〜一九三七)が近代の第一者であろうか。現役の書家としては芸術院賞、日展文部大臣賞の松井如流(横手・一九〇〇)が一人気を吐いている。大東文化大教授で、歌人と二足のわらじをはき歌誌『霸王樹』を主宰。

美術評論畑には、若手のホープとして縦横の活躍をしている高階秀爾(仙畑・一九三二)がある。父は哲学者高階秀治で、疎開時代は角館中学で高井有一の一年上級だった。

舞踊界に革命児

音楽界も多士済済。今上天皇の学習院時代に唱歌を教えたという小松耕輔(東由利・一八八四〜一九六六)は、学習院やお茶の水女子大で長く音楽教育に携ったほか、「泊り舟」などの作曲でも知られている。なにしろ東京音楽学校在学中、歌劇「羽衣」(一幕)を作曲して公演したほどで、これはけだし本邦における創作歌劇の第一号か。オペラ「道成寺」も作った。

由利の山中、玉米から出た彼の兄弟はまれにみる音楽一家で、次弟平五郎も作曲家で国民交響楽団の指揮者、三弟三樹三はバイオリンニスト、末弟清は、フランス文学で東大教授、ピアノで芸大教授



石井 渥

海林と股旅歌謡の人気を分けたのが上原敏(大館・一九〇八〜一九四四)で、この人は専修大学出身。舞踊界では日本における創作舞踊の創始者ともいべき石井渥

(山本・一八八八〜一九六二)の存在が断然光彩を放っている。秋田中学を出て文学者を志し上京したドモリの青平が、めぐりめぐって帝劇のローシーについてオペラの修業をし、のち浅草オペラの全盛期に活躍する。しかし寄席芸人的な世界に安住することをいさぎよしとせず、芸術的舞踊の真髓を求めてヨーロッパ各地を武者修業、帰国後は小山内薫、山田錦箒らと新しい劇場運動もこころみだ。昭和二十八年の初演以来二百数十回の公演記録をもつ「人間釈迦」では、芸術祭文部大臣賞を受けた。敏、真木の二の息は、ともに日本の楽壇の将来をになう作曲家として囑望されている。

渥を洋舞界の革命児とすれば、花柳界に出て大正八年の「惜しむ春」発表以来新舞踊運動を続け、戦後はアメリカ公演もした五条流家元の五条珠実(秋田・一八九〇)は日舞における改革派。クラシック・バレエには、ソルボンヌ大学とパリ国立音楽学校に学んだアベ・チエ(若美)がある。チャイコフスキー記念東京バレエ団のプリマだ。

渥や珠実の舞踊精神を突きつめてゆけば、目下日本の舞踊界で最

の両刀使い。音楽評論にも手をひろげ「現代音楽鑑賞」や「管絃楽法」の訳書もある才子。

「浜辺の歌」 「歌を忘れたカナリヤ」など白秋や八十らのすぐれた詩に作曲し、鈴木三重吉の『赤い鳥』運動の盛んなころに一世を風びした成田為三(森吉・一八九三〜一九四五)の名はあまりにも有名。「山は夕焼け」「おもちゃのマーチ」の小田島樹人(鹿角・一八五五〜一九五九)は、戦後県内の高校教師をやりながら、合唱団の指導育成に力をつくした。

「鳳城の花嫁」でアジア映画祭音楽賞を受けた深井史朗(秋田・一九〇七〜一九五九)は、一般に映画音楽畑の人と思われ勝ちだが、昭和十三年、新交響楽団の第一回コンクールで入選した「パロディ的な四重奏」をはじめクラシック作品も多い。戦争中満州国のために作った交響的組曲「大陸」、東京遷都五百年祭のための「交響絵巻―東京」という大曲もある。北川冬彦、草野心平らとポム・クラブを結び、現代詩の作曲をこころみた時期もあり、その延長上にブランドンの詩による舞踊組曲「秋の声」がある。「雪女」では放送芸術祭奨励賞をもらっている。

深井は秋田中学で東海林太郎(秋田・一八九八〜一九七二)の後輩にあたり、東海林が満鉄図書館長を辞めて帰国し生活のあてのなかつたとき、ボーカルグループに転じて彼に歌手としてのきっかけを作ったのがこの深井。「赤城の子守唄」「国境の町」は今も人々に歌われ、近く銅像が秋田市に建つ。

東海林は早大出だが、戦前大学出の歌手というのは常識外のことと考えられていた。もう一人、「上海だより」「妻恋道中」で東

も前衛的な舞踊家である土方巽(秋田)の生き方に突き当たるだろう。苛酷なまでに肉體表現の極限を自己に要求し、肉體で思想を語って、反舞踊とまでいわれる土方は、近代百年の秋田の芸術文化、いな日本の芸術文化の歩みきたった歴史を現在の一点に凝縮して呈示しながら、私たちに幾多の考えるべき問題を投げかけているようにさえ思われるのである。

以上、文学を中心に芸術文化の各分野にすぐれた業績を残してきたふるさとの先覚、あるいは無限の可能性を持って現在第一線に活躍している人々の名をあげてきたのは、これら過去、現在に名をなした人々は、陰に陽に人縁・地縁をたよりながら次第に自己の世界を確立していったものであり、活動の舞台が多く東京中心のものであったにしろ、秋田の文化もまたこれらの人達と有機的に関わりながら発展してきたものという筆者の考え方による。

その事実を演繹して人物を中心としたVそれこそ秋田の文化史を組み立てたいのだが、すでに紙数が尽きた。人名の羅列に終始したことをうらみとする。なお、いちいち書名をあげ得ないが、本稿のため秋田県編「秋田の先覚」その他多くの人々の著述を参考にしたいことを断っておく。

(注) 氏名の下、カッコ内は現行行政区制による出身市町村名と生没年。ただし、現存者の場合、紙数の都合で一部生年はぶらしたものがあ

(秋田近代文芸史研究会員)

人物を中心とした

文化郷土史

—山形県—



松坂俊夫

風土と文化

はるかな昔は、「出羽の国」と呼ばれ、吾妻火山群のふもとから流れ出る最上川の縦断する置賜地方、最上地方、庄内地方をひとつにして、山形県が成立したのは明治九年（一八七六）である。「やまがた」の名は、今から約六百年前の室町時代の文書に、ひら仮名で見えるのがはじめてで、漢字の「山形」は、今から三百五十年前の元和九年の検地帳にあるのが最初といわれている。

山形県は、その名のあらわすように、山また山にかこまれている。西南部には新潟・福島両県にまたがる磐梯・朝日国立公園があり、その北方には、森敦の芥川賞受賞作でも著名な月山がそびえ、県南の吾妻連峰は、那須火山帯に属する大火山群がつらなり、今なお噴煙をあげている活火山もある。県東には、宮城県にまたがって、熊野岳を主峰とする、樹氷とスキーで有名な国定公園蔵王峰がある。さらに県北部には、秋田県と境する鳥海国定公園があり、去年、百五十余年ぶりに黒煙を噴いて話題を呼んだ、東北一の秀峰鳥海山が長大な山裾を日本海の荒波に没している。

四辺を山に囲まれたこの県の気候はきびしく、その特色として、夏の高湿多湿と、冬の積雪寒冷があげられる。四〇・八度という我が国最高気温の記録をもつのも山形県であり、それは昭和八年七月二十五日のことであった。八月と一月の平均気温の較差は二十六度、冬は季節風がはげしく、積雪期間も五か月の長きにわたり、最上地方の一部では、二メートル余の積雪のあるところさえある。

こうしたきびしい、しかし美しい自然の中で、山形県の人々はいきおい内向的・思索的な、そして、感覚的・独創的な性向をつかわれてきたものようである。言いかえれば、山形の風土は、学者や詩人・芸術家を生むにふさわしく、事実、多くのそうした文化人を輩出している。

明治の作家

日本近代文学の上に、山形県出身の文学者として、もっとも早い時期に彗星のようにあらわれ、三十二歳を一期にその生涯を閉じたのは、樗牛・高山林次郎（一八七一―一九〇二）である。樗牛は、鶴岡市に、庄内藩士齋藤親信の次男として生まれ、同藩士高山久平の養子となる。樗牛という号は、ひねくれたコブのある大木の意と、牛は風をとる点では猫に劣るといふ意味の組み合わせで、いずれも俗に通じぬことをあらわしている。樗牛は仙台の第二高等学校を経て東京帝国大学哲学科に学ぶが、在学中に「読売新聞」の懸賞小説募集に応じて書いた「滝口入道」によって認められ、「帝国文学」を舞台に発表した数々の評論



高 山 樗 牛

で文壇にその地位を確立。雑誌「太陽」の文芸欄を担当し、文学はもとより、哲学・歴史・宗教・美術の分野にも才筆をふるう。東京

帝国大学卒業後、母校第二高等学校教授を経て「太陽」の文芸主任となり、「日本主義」「日蓮主義」などを続けて発表し、当代随一の論客であった。

最上川のばれば下る船舟のいなにはあらずこの月ばかり

という、「古今集」の歌にちなむ雅号の、船舟・田沢錦（一八七四―一八九六）は鶴岡市の医家の生まれ。十八歳の春上京して文芸雑誌「伊良都女」を介して知り合った山田美妙を訪ね、文学上の師と仰ぐが、やがて二人は恋仲となり結婚する。しかし、美妙の義母と衝突を重ね、その上胸を病んで美家へ帰るが、一か月も経ぬうちに美妙は他の女性と結ばれる。明治二十九年には、すでに病勢も悪化し、自殺のうわさもささやかれる中で、二十一年九か月の短い生涯を終わった。書き残された小説は、「医学修業」「しろばら」「小町湯」「五大堂」「唯我独尊」の五篇。新奇な題材と、大胆な構想で注目された本県初の女性作家であり、同時に、明治の山形の女性として、妥協を知らぬ自我に生き、日本近代文学の上に、小さいながらもたしかな火を点じた先駆的な作家の一人であった。

他にも明治の文人としては、みずから小説や紀行文を書き、博文館の女婿として「太陽」「少年世界」「文芸倶楽部」など、当時の大雑誌を編集発行し、多くの作家を世に送った米沢市出身の乙羽・大橋新太郎（一八六九―一九〇一）、高山樗牛の実弟で、「帝国文学」を舞台に活躍し、「芸術と人生」「哲人何処にありや」などの著者、齋藤野の人（本名信策・一八七八―一九〇九）も忘れられることはできない。

詩歌の世界

山形といえは齋藤茂吉（一八八二―一九五三）、茂吉といえは山形といわれるほどに、本県出身の文学者としての茂吉の存在は大きい。そしてまた茂吉ほど、故郷の山河をみずからの心として作品化した歌人も類はない。

たましひを育みますと聳えたつ蔵王のやまの朝ゆきけむり
最上川逆白波のたつまでにふぶくゆふべとなりけるかも



齋 藤 茂 吉

茂吉は上市市金瓶の農家、守谷伝衛門の三男として生まれ、明治二十九年、上京して医師齋藤紀一の養子となり、開成中学、旧制一高を経て東京帝国大学医学科卒業。生涯精神科医を業とした。一高在学中、正岡子規の「竹の里歌」を読んで作歌を志し、伊藤左千夫の門に入り、「アララギ」の創刊に参加。歌集「赤光」「あらたま」「ともしび」「曉紅」「白き山」など。その作品は近代短歌の最高峰に位置し、歌論、万葉集研究の類も多く随筆でも一家をなしている。その全著作は「齋藤茂吉全集」に収録され、遺稿・遺品は生地上山市の「齋藤茂吉記念館」に展示されている。

茂吉を生涯の師として、山形を一度も離れて住むことなく、故郷

の風土と生活を歌い描き続けたのは、哀草集・結城光三郎（一八八三―一九七四）である。哀草集は山形市下条町に生まれ、本沢村の農家結城太作の養子となり、農作業のかたわら歌をよみ、大正三年、手紙を送って茂吉に教えを乞うて以来師事。歌集に「山麓」「すだま」「群峰」など。随筆集に「村里生活記」「続村里生活記」「小風土記」など。

茂吉の大石田在任時代、つまり昭和二十一年一月から翌年の十一月まで、戦後の物資欠乏の中で、終始心をこめて茂吉を世話したのは板垣家子夫（一九〇四―）であり、家子夫自身、歌集「磯底」以来、清朗雄渾な茂吉の歌風を受け継ぐ歌人である。歌誌「群山」に連載の「大石田の茂吉先生」は、茂吉の人と文学を語って余すところがない。

家子夫同様、茂吉に師事して親交を重ねた歌人に黒江太郎（一九一〇―）もおり、南陽市に在住。歯科医のかたわら歌作にはげみ、歌集「湖盆」がある。なお県内にあって、歌誌「えにしだ」を主宰する結城健三（一九〇〇―）、歌誌「黄鷄」の主宰者で、最近随筆集「見えざる人」を上梓して好評を博した齋藤勇（一九〇四―）、島木赤彦、茂吉に師事した「アララギ」はえぬきの歌人大導寺吉次（一八九七―）など、歌人の層はあつく、しかも多彩である。

俳句には、「日本及び日本人」の俳壇に投稿以後、大須賀乙字に私淑、乙字とともに東本願寺法主、句仏上人の俳誌「懸葵」を編集、いわゆる「懸葵派」の代表的俳人の一人、三幹竹・名和香堂

(一八九二) がいる。三幹竹は河北町の安楽寺に生まれ大谷大
学在学中から句作をはじめ。現在安楽寺住職。句集に「三幹竹句
集」があり、俳誌「ひまわり」の選者として後進の指導にあたって
いる。

「なんざんじ」という方言から、「なんざんじ」と、天来の声のよ
うに響いてきたことは雅号にしたという南山寺・佐藤健太郎(一
九一五〜一九七四)は、生まれは福島県だが、幼少から本県に住
み、祖父の時計商を継ぐべく上京中に俳句と出会い、以来上山市に
あって、俳誌「楽浪」を発行。「虹仰ぐ」で第十六回角川俳句賞を
受賞している。

昭和四十九年度芸術選奨新人賞を受賞した鷹羽狩行(本名高橋行
雄・一九三〇)も鶴岡市の生まれで、句集に「誕生」「遠岸」
「平遠」があり、句界の新鋭として注目されている。

萩原朔太郎、室生犀星とともに詩誌「感情」を創刊し、山形県の
文学風土の中でもっとも早い時期に活躍した近代詩人は、竹村俊郎
(一八九六〜一九四四)である。竹村は村山市の生まれ。大地主の
次男で、山形中学卒業後上京。朔太郎や犀星と親交を結び、詩集に
「葦茂る」「十三月」「旅人」などがある。

昭和の新しい詩流「四季」派にあって、やや異質な硬質の叙情を
形成してきた神保光太郎(一九〇五)は、山形市の生まれ。旧
制山形高校から京都帝國大学に学び、詩集に「雪崩」「冬の太郎」
「青の童話」「陳述」など九冊。「神保光太郎全詩集」も出てい
る。現在日本大学教授。

現代の作家

明治の樗牛、稲舟以後、山形における小説家の出現は、大正期を
ほとんど空白にしたまま、昭和も戦後まで待たねばならない。戦前
に活躍した作家といえば、昭和九年から翌年にかけて、「早稲田文
学」に連載した「悪童」によって、芥川賞の候補となり、「村の倫
理」「村一番の偉い娘」などの作品集をもつ河北町生まれの逸見広
(一八九九〜一九七一)があげられるくらいであろう。

斎藤茂吉の故郷ということもあって散文不毛の短歌的風土とさえ
言われていた山形であるが、その山形の作家として、しかも地元の
同人雑誌「山形文学」に発表した小説「少年の橋」で、県人初の芥
川賞を受賞したのは、山辺町生まれの後藤紀一(一九一五)であ
る。後藤は本来日本画家であり、「少年の橋」以後数作があるの
みで、現在はほとんど創作の筆を執っていないようであるが、後藤
の受賞が、あたかも口火となったかのように、芥川賞、直木賞の受
賞者が、次々に本県出身の作家の中から生まれることになる。

「年の残り」で、昭和四十三年度上半期の芥川賞を受賞した丸谷
才一(本姓根本・一九二五)は鶴岡市の医者の子に生まれ、鶴
岡中学から新潟高校を出て東京帝國大学英文科に学ぶ。ゆたかな西
欧文学の教養を母胎に、小説に評論に縦横の活躍を続けている。小
説に「笹まくら」「にぎやかな街で」「たった一人の反乱」(谷崎賞
受賞)、「横しぐれ」など。評論集に「梨のつぼで」「後鳥羽院」
(読売文学賞受賞)「日本語について」など。翻訳も数多くある。

鮮烈な土着の詩魂を核として、詩に評論に旺盛な活躍を続けてい
るのは眞壁仁(一九〇七)である。眞壁は山形市の農家に生ま
れ、鋤を手に農をいとなみつつ詩作に入り、ひとりの人間として
の、誠実な苦悩と歓喜を、宗教的とさえいえる格調の高さと、理想
の社会へのヒューマンな情熱をこめてうたい、詩集に「街の百姓」
「青猪の歌」「日本の湿った風土について」などがある。眞壁には
詩作の他にも、多くの詩人論、芸術論、教育論などがあり、単行本
になっているものとしては、「人間茂吉」「黒川能」「斎藤茂吉の
風土」その他がある。

昭和三十四年に、詩集「不安と遊撃」をもって戦後の詩壇に登場
し、第十回H氏賞を受賞、続いて詩集「地中の武器」、評論集「死
にいたる飢餓」「詩と反詩」全詩集・全評論集を刊行。血肉化し
た思想と方法で、前衛的な作品を発表しているのは黒田喜夫(一九
二六)で、米沢市の生まれ。

黒田とともに、戦後詩壇の代表的存在と目されるのは吉野弘(一
九二六)である。吉野は酒田市の生まれ、社会的な批評精神を
根底に、人間への温かな愛を、磨かれた平易なことばで形象化し、
詩集に「消息」「幻・方法」「10ワットの太陽」があり、「感傷旅
行」で昭和四十七年度読売文学賞を受けている。

なお、詩集「孤島記」で第二十二回H氏賞を受けた粒来哲蔵も米
沢市の生まれ。県内にあって活躍している詩人には佐藤総石、高橋
兼吉等がいる。

言葉の魔術師、現代の戯作者、笑いの中にあいくちを隠す男
等々多彩な評価に包まれた当代随一の人気作家、井上ひさし(本名
内山慶・一九三五)の生まれも川西町である。井上は中学三年
の春まで川西町に育ち、その後仙台一高から上智大学に学ぶが、在
学中から放送作家として活躍。代表作に「ひょっこりひょうたん島」
「ネコジャラ市の十一人」。劇作家としては「うかうか三ちよろ
ちよろ四十」(芸術祭奨励賞)、「日本人のへそ」「表裏源内蛙合
戦」「道元の冒険」(岸田戯曲賞・芸術選奨新人賞)をはじめ、
「珍約聖書」「蘆原検校」など一作ごとに話題を呼び、小説では、
第六十七回直木賞受賞の「手鎖心中」以来、「モッキンポット師の
後始末」「四十一番の少年」「ドン松五郎の生活」「合牢者」など
その著作は数多い。また最近「家庭口論」「日本亭主図鑑」等の
エッセイにも、笑いの中に痛烈な文明批評を展開し、今後の活躍の
いよいよ期待される作家である。

「深い海」で「オール読物新人賞」を受賞し、昭和四十八年「暗
殺の年輪」で第六十九回直木賞を受賞した藤沢周平(本名小菅留治
・一九二八)は、鶴岡市の生まれ。山形師範学校卒業後、郷里
で中学校教師をつとめたが、その後上京して業界紙の編集のかたわ
ら創作にうちこむ。その作品は暗い宿命の中でひたむきに生きる人
間を描いて時代小説に独自の世界を展開している。作品集に「暗殺
の年輪」「又蔵の火」「闇の梯子」などがある。

他にも県人作家には、「アプレゲール叢業」の一冊に、異色作
「触手」を書いた南陽市生まれの小田仁二郎、「密約」「黄色い娼

婦」等の作品集をもつ酒田市生まれの森万紀子、バイク事故で若くして他界したが、死後一冊本の全集の編まれた永山一郎などがいる。児童文学の分野には、ひろすけ童話の呼称で親しまれ、近代的な童話の世界を開拓した浜田広介（一九三三～一九七三）が高島町の生まれである。広介は県立米沢中学を卒業後早大英文科に入学、在学中に書いた「黄金の稲束」が「大阪朝日新聞」に一等入選以後童話一筋に、「むく鳥のゆめ」「竜の眼の涙」「泣いた赤鬼」等の名作をはじめ、七百余の作品を書き続けた。「ひろすけ童話」をつらぬくものは、人間への温かな善意である。

児童文学者であり、同時に教育評論家としても著名な国分一太郎（一九一一～）は東根市の床屋の息子として生まれ、山形師範学校卒業後、教師として生活綴方の運動を推進。児童文学の作品も、生活体験を軸とした「たわしのみそ汁」「カヌヒモトの思い出」「鉄の町の少年たち」など数多く、「国分一太郎児童文学全集」全六巻もある。

県内にあって活躍している児童文学者には、社会評論家としても知られる須藤克三（一九〇六～）がいる。須藤は、山形師範学校を卒業し小学校教師をつとめた後上京して日本大学高等師範部に学び、教育雑誌や小学館の編集にたずさわる。戦後帰郷して文化運動にしがたい、児童文学研究誌「もんべの子」を育成。作品に「出かせぎ村のゾロ」「友情とつげき隊」などがあり、絵本や紙芝居にも意欲的に取り組んでいる。第十二回久留島武彦文化賞を受賞。山形市で中学校教師をしている鈴木実も、「もんべの子」の同人中若手

芸術院賞を受賞した新関良三（一八八九～）は河北町の生まれ。東京帝国大学独文科卒業。浦和高校長、埼玉大学長などを歴任。ドイツ文学研究の第一人者であり、シラーと、ギリシャ演劇に関する著作は枚挙にいとまがない。同じくドイツ文学には、「独和辞典の相良」として著名な相良守肇（一八九五～）もあり、鶴岡市の生まれである。

民法の義妻栄（一八九七～一九三七）は米沢市の生まれ。小・中学校を首席で通し、一高も入学、卒業ともに一番。東京帝国大学独法科に学び卒業後は教室に残り、鳩山秀夫教授のもとで助教授、三十歳の若さで教授となり、ドイツ流の概念的な法学と、実証を重んずる英米の判例法学を集大成して、いわゆる「我妻民法」を築きあげた。

先にも記したように、山形は学者の輩出する風土であり、哲学の高橋里美、高山岩男、国文関係では、五十嵐力、本間久雄、近代漢詩の土屋竹雨、フランス文学の斎藤磯雄、美術評論の田中一松、今泉篤男等も生んでいる。

また県内にあって、「貝の科学」をあらわし、サンケイ児童出版文化賞・大賞を受けた、阿部襄、「飛行蜘蛛」で日本エッセイストクラブ賞を、「空を飛ぶクモ」でサンケイ児童出版文化賞を受賞の錦三郎等のすぐれた科学エッセイスト。そして、羽黒修驗道の研究で柳田国男賞受賞の戸川安章、民話の採集研究の第一線で活躍している武田正等もいる。

雪がコンコン降る。

人間は

その下で暮らしているのです。



阿部次郎

の児童文学作家として有望である。

学術・評論

「三太郎の日記」といえば、大正期はもとより、昭和も戦前・戦中、そして戦後も心ある青年たちに愛読されてきたが、その著者阿部次郎（一八八三～一九五六）は、南に月山、北に鳥海山を望む松山町の生まれ。阿部は荏内中学から、父の勤めの関係で山形中学に転じ、校長排斥を企てて山形中学を追われて上京、京北中学を経て、一高、東京帝国大学哲学科に学ぶ。卒業後は「東京朝日」の文芸欄で批評活動を展開、「思潮」の編集主幹を経て渡欧。大正十年以降東北帝国大学教授（文学部）。哲学、思想はもとより、東西の文学芸術を対象に論評。その全業績は「阿部次郎全集」全十七巻に収録されている。

昭和の初期、既成の歌壇の批判から出発し、「アララギ」打倒を叫び、新興短歌運動に大きな影響を及ぼした短歌誌「まるめら」は米沢市から発行されたが、その実質的な主宰者であった大熊信行（一八九三～）は、経済学者であり、同時に鋭い時代感覚をもって、政治・経済・社会・文化の広範囲に及ぶ評論を展開してきた異色の評論家。専門の「経済本質論」「国家科学への道」等の著作の他にも、「国家悪」「生命再生産の理論」等数多い。米沢市の生まれ。東京高商卒。現在創価大学教授。

「ギリシャ・ローマ演劇史」全七巻によって学士院恩賜賞、日本

という詩を冒頭にした「山びこ学校」は、戦後、教育界山形の名を全国に知らしめることになったが、その指導者は無着成泰（一九二七～）である。その教育は、村山俊太郎（一九〇五～一九四八）や、国分一太郎の生活綴方に根ざした、いわゆる「北方性教育運動」の流れを継承しながら、無着の強烈な個性と、詩人的情熱の生み出した教育の成果であった。無着は山形市の生まれ。山形師範学校卒業後、「やまびこ学校」こと、山元村中学校の教師となる。現在明星学園教諭。中学生時代を「やまびこ学校」に学んだ佐藤藤三郎（一九三五～）は、上山農業高校を卒業し、農村評論家として活躍。著書には「二十五歳になりました」「底流からの証言」その他がある。

絵画・彫刻

明治の初期に活躍した本県の実術家には、細谷風翁（一八〇七～一八八二）と、その子米山（一八三七～一八八五）、そして菅原白竜（一八三三～一八九八）等がいる。風翁については、石川淳もその「諸国崎人伝」の中に記しているが、山形市の宝幢寺の生まれ。細谷家の養子となり医者の家業を継ぐが、独学で絵をよくし、明治維新後、おびただし絵を残しており、自由奔放な画風は独特の迫力を有している。風翁の次男の米山は長崎や京都で南画を学び、山形で医者を開業のかたわら細谷塾を開き漢籍も講じた。

白竜は、長井市の神主の家に生まれ、江戸で南画の巨匠池大雅の画風を学び、「日本百景」によって画壇に認められ、明治十七年の

絵画共進会では、審査員もつとめた。

近代彫刻界の先覚者であり、山形の誇る彫刻家には新海竹太郎（一八六八～一九二七）がいる。新海は山形市の仏師の家に生まれ、十六歳頃細谷塾で書画、漢学を学んだ。ちなみに、全国的には無名に近かった風翁父子が、世に出るきっかけとなったのは、新海



作品「ゆあみ」

がその晩年に「風翁遺墨・付米画山存」を刊行したことにあった。

新海は十九歳の秋、青雲の志を抱いて上京、馬の彫刻で認められ、明治三十三年にはフランスに留学。続いてドイ

ツへ渡り、ベルリン美術学校でベルテルに学ぶ。その名作には第一回文展に出品した「ゆあみ」の他に「ふたり」「鏡のうた」「羅漢」など数多い。特に、明治を代表する傑作といわれる「ゆあみ」は、すらりとした日本人離れのした端正な姿態を有し、新海がヨーロッパ古典から学んだ理想像の表現といえよう。

竹太郎の甥、新海竹蔵（一八九七～）も、竹太郎に師事し、彫刻家として珠玉の作品を制作。代表作に、現代感覚による格調高い作品「少年」「砧」「海女」などがある。

桜井祐一（一九一四～）は米沢市の生まれ。平柳田中に学び、「ネグリジェの女」他の秀作が多い。国際的な彫刻家として活躍している山形市生まれの彫刻家には吾妻兼次郎（一九二六～）がい

る。吾妻は東京芸大に学んだ後、イタリヤへ渡りミラノの美術学校でマリノ・マリニの指導を受け、各種の国際展に出品。東洋的な無

の精神を金属の素材の中に抽象化し比類のない世界を創造しており、今後の活躍が期待される。国内では高村光太郎賞、国立近代美術館賞等を受賞。ミラノに在住。

建築家伊東忠太（一八六七～一九五四）は、米沢藩医の家に生まれ、東京帝国大学工学科を卒業。建築研究のために欧米に留学し、東京帝国大教授となり、日本建築芸術の発展経路を明らかにするとともに、日本建築の伝統美を守り、明治神宮、築地本願寺、平安神宮等の設計者としても著名である。

大正・昭和期に活躍した洋画家には、米沢市生まれの樺貞雄（一八九六～一九五七）がいる。樺は岸田劉生に師事して院展、春陽会、国画会等に作品を発表。劉生の画風を継ぎ写実に徹した、みかん、ぼたん等の静物画や、劉生の再現を思わせる少女像等が著名である。

昭和四十九年度芸術選奨文部大臣賞を受賞した日本画の小松均（一九〇二～）は村山市の生まれ。日本美術院同人として無類の墨絵の世界を創造。受賞作は最上川を描いた雄渾な大作。京都は大原に在任して墨絵の可能性を一途に追求し続けている異色の日本画家であり、今後その作品はますます高く評価されてゆくものと思われる。

他にも本県生まれの画家には、日本画の福王字法林、遠藤桑樹、洋画にモダンアートの清野恒、安井賞受賞の近岡善次郎等がいる。

工芸の分野では、漆器の結城哲雄、



土門拳

佐藤正己、鋳物の横倉嘉山等が、それぞれに秀抜な作家として知られている。

「古寺巡礼」「ヒロシヤ」「筑豊のこどもたち」「宝生寺」「文楽」等に、日本人とは何かをレンズを通して追求し続け、世界的な写真家として知られる土門拳（一九〇九～）は酒田市の生まれ。父が、たまたま小杉天外の徒手空拳から身をたてる人間をテーマにした小説を読んでいた、わが子に「拳」と命名したという。七歳のとき横浜に移住、神奈川県立二中を出て日大夜間部に通ったが、中退して、上野池の端の宮内幸太郎写真館に入り、その後写真の道を進む。毎日芸術賞、菊池寛賞等、その受賞は枚挙にいとまなく、対象を執拗なまでに追求せずにはやまぬ厳しい制作態度も有名である。

音楽・芸能

山形出身の作曲家には、交響曲「平和」「奉祝前奏曲」「マーチ・オマージュ」などの作曲で知られる米沢市生まれの大沼哲（一八九一～一九四四）がいる。大沼は陸軍戸山学校音楽隊でクラリネットを担当しながら作曲に精進。昭和二年からパリのスコラカントルム大学に入学し、ダンディについて作曲を研究した。帰国後は音楽少佐。指揮者として活躍したが、戦争は作曲の時を与えず、従軍中

フィリピン沖で戦死。

我が国レコード歌手の第一号として輝かしい業績を残したのは、天童市に生まれた佐藤千夜子（一八九七～一九六六）である。全国にその名が知られたのは、「波浮の港」「マノンレスコウの唄」「椿姫」「東京行進曲」「紅屋の娘」などの名盤で、昔悲しい銀座の柳とうたわれた「東京行進曲」は、菊池寛の、曲名と同じ小説の映画化により、映画主題歌のジャンルにもその名をとどめることになった。

その鈴さえずびくひびく」と歌いおこされる「国境の町」（作詞・大木博夫）は、昭和九年にレコード化されるや全国を風靡したが、作曲したのは鶴岡市生まれの阿部武雄である。阿部は東洋音楽学校を卒業し、レコード会社の専属作曲家として多くの作品を残している。

テレビに映画に、風格ある喜劇俳優として、庶民の哀感を笑いに包んだ演技が愛されている伴淳三郎（一九一〇～）は米沢市の生まれ。曾祖父は米沢藩の鉄砲隊の隊長。父は鈴木蘭外という南画家であった。伴は高等小学校卒業後日本橋の呉服問屋へ奉公に出るかたわら新劇研究所へ通ったりしたが芸能界入りのきっかけとなる。シャンソンの岸洋子は酒田市の生まれ。県立酒田東高校二年のとき上京して歌の道へ進んだ。そして生まれは東京だが、酒田と鶴岡の人を父母とするバイオリニストに諏訪根自もいる。また、全国学校音楽コンクール高校の部で、通算八回連続優勝の指導者、阿部昌司の偉業も特筆されなければならない。

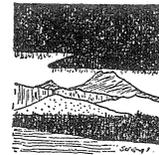
（山形県立山形中央高校教諭）

人物を中心とした

文化郷土史

— 福島県 —

宗像喜代次



「みちのく」と言われた東北地方で、中世の昔その中心は平泉であった。近世、近代、そして現代の中心地は仙台である。福島県はその玄関口にあたるわけである。みちのくに関係する戦争は、いつもこの玄関口にあたる本県で行われた。源頼朝の奥州征伐も決戦は本県で行われたし、南北朝の抗争の鍵と言われた奥羽の争奪戦も本県が中心となって行われた。明治維新の奥羽連合軍の本拠は仙台と白石に置かれていたにもかかわらず、その戦闘のすべては本県の会津が引き受けたのである。

昔の話は別として、明治以降は「白河以北一山百文」とさげすまれたが、その一山百文の玄関口と中心のお座敷に通るまでの廊下の部分が福島県というわけである。つまり、ここは中心地ではなく、文化、経済、政治の通過地である。戦争となれば防波堤の役割となるのは当然であった。

明治維新の官軍は、勝利者であることを自らも確認し、また外部にも知らしめるため奥羽進撃は必要なことであった。その犠牲となったのが本県であり、会津藩であった。賊軍の汚名をきせられた本県人は、政府の要路から締め出され、官途からも、軍閥からも締め出されたのは、こうした事情からであった。

しかし明治の本県人は、むしろそのエネルギーを文化、思想の面に求めた。封建時代の最後の華と言われた会津白虎隊の決戦から、わずかに数年後には、同じ会津の土地に自民民権の血闘がくりひろげられるのである。これもまた明治時代に置かれた本県の立場と無関

係とは思われない。

河野広中（一八四九～一九二三）は反逆思想を足場として中央政界に乗り出した代表的な人物である。思想運動のことは取りあげないこととするが、明治の本県の置かれた立場から、学者の道を選んだ人は少なくない。これも他県と比較して多いということではないが、本県から中央に進出した人物のうち、学者が比較的に多いとはいい得ると思う。次にその一端を紹介してみたい。

明治期の学者

まず野口英世（一八七六～一九二八）をあげる。明治九年猪苗代湖畔の貧農の子として生まれ、刻苦して医学者になった人物。活躍の場は主としてアメリカだが、世界的な医聖として知られているので人となりは省略する。磐梯山を背景とした湖畔にはその生家が保存されている。

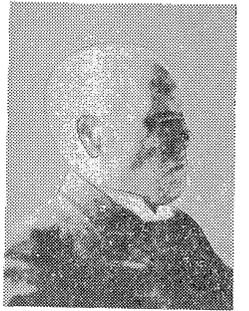
同じようにアメリカで活躍した学者に朝河貫一（一八七三～一九四八）がいる。明治六年二本松藩士の家に生まれた。父は傘張り内職で苦労したという。朝河は明治二十五年東京専門学校文学部（早稲田大学の前身）に学び、明治二十八年にはアメリカのダートマス大学に留学した。彼はそのままアメリカで研究生活を送り、昭和十二年にはエール大学の教授（史学）に就任した。戦後の昭和二十三年八月に死去したが、その教壇生活は三十五年におよんだ。ダ

トマス大学から名誉文学博士号が贈られている。

京都帝国大学の総長になった人物が二人いる。小西重直（一八七五～一九四八）は明治八年山形県に生まれたが、会津若松の小西家の養子に迎えられ、会津人として育った。明治三十四年東京帝国大学文科（哲学）を首席で卒業、ドイツやイギリスに留学して研究を重ね、京都帝国大学の文学部長を長く勤めたあと、昭和八年には総長に迎えられた。戦後の昭和二十三年死去。新城新蔵（一八七三～一九三八）は明治六年会津若松の出身。東京帝国大学で物理学を修め、ドイツに留学して宇宙物理学を研究、帰国して大正九年京都帝国大学にわが国最初の宇宙物理学科を創設した。このあと大正十二年理学部長、昭和四年総長となった。昭和九年には上海自然科学研究所長となったが、四年後に南京で死去した。

忘れられない存在に服部宇之吉（一八六六～一九三九）がいる。慶応三年二本松藩士の家に生まれた。生まれると間もなく母は病死し、父も明治維新の戦乱で死亡した。こうして服部は父の弟の家で育てられた。明治二十三年東京帝国大学で哲学を学び、東京高等師範学校で教壇に立ったあと文部大臣秘書官に迎えられた。このあと清国に留学して東洋倫理を研究、明治三十五年には北京大学教授、大正十五年には京城帝国大学総長となった。中国哲学研究の権威と言われたが、昭和十四年に死去した。

東京帝国大学総長になった人物に山川健次郎（一八五四～一九三一）がいる。安政元年会津若松の出身。会津藩校日新館の俊才とし



山川健次郎

て知られ、明治四年にはアメリカ留学生に選ばれている。四年後に帰国すると東京帝国大学理学部教授に迎えられる、わが国の物理学研究のレールを敷いた。明治三十四年に四十八歳で総長の

のイスについた。このあと九州帝国大学総長、再び東京帝国大学総長、京都帝国大学総長などを歴任、昭和六年に死去した。

明治、大正の二代の天皇の侍医を勤めた医学者に三浦謙之助（一八六四～一九五〇）がいる。明治元年東北の保原町の出身。東京帝国大学で医学を修め、その付属病院で活躍、明治三十五年には日本神経学会、翌三十六年には日本内科学会を創立するなど、当時の医学界の中心人物となった。こうして明治天皇の侍医に迎えられる、さらに大正天皇の侍医も勤めた。晩年は同愛病院長として多くの人々の治療に尽くし、昭和二十四年には文化勲章を受けた。ところで戦後はアメリカ軍によって同愛病院や自宅が接収され、自宅の裏にある洋間一室に起居して孤独な生活を続けた。そして両国駅東側の小さな木造の病院に日本医療団中央病院の看板をさげ、ほそぼそ診療を続けた。すでに八十六歳。昭和二十五年十月十日、そぼ降る雨のなかを往診に出かけ、その帰りに道路で卒倒した。朝になって牛乳配達の人に発見されたものの、麻薬と注射器を持っていたた



三浦謙之助

め、モヒ中毒の行路病者として放置され、夜になって三葉病院に運ばれたが、そのまま息を引き取った。どんな貧しい人にも、いやな顔ひとつしないで治療にあたった名医の最期だった。

学者としては、戦後の初代最高裁判所長官に迎えられた三淵忠彦（一八八〇～一九五〇）も忘れられない。会津武士の流れをくむ剛直で正義を愛した法律学者だった。

以上は明治時代に本県の置かれた立場から考え、学者として出世した人が他に比して多かったことを言いたかったわけである。

文芸

小説という言葉がつかわれたのは明治十八年、坪内逍遙の「小説神髓」からである。この同じ年、東海散士（一八五二～一九二二）の「佳人の奇遇」が出された。東海散士は会津藩士柴左馬蔵の四男に生まれ、本名は柴四朗である。会津藩は明治維新の戦争に敗れ、柴一家は流浪し、四朗は辛酸をなめる。しかし苦しい生活のなかで英仏両語を学び、やがてアメリカに渡ってフィラデルフィア理財学校を卒業、明治十七年帰国して農商務大臣秘書官となった。「佳人の奇遇」は帰国して間もなく筆をとったわけである。全編十六巻で、



東海散士

木版で一巻ずつ刊行された。改造社の現代日本文学全集年譜には「洛陽の紙佃ために高し」とある。明治初期の小説として初のベストセラーであった。四朗はのち郷里の会津を地盤とし

て代議士になり、政界に活躍した。

同じ時代に二本松出身の服部誠一（一八四二～一九〇八）がいる。明治七年「東京繁昌記」、同十九年「二十三年国会未来記」、同二十一年「春告鳥」、「二十世紀新亜細亜」、同二十八年「支那未来記」などを書いた。政治小説、未来小説である。「二十世紀新亜細亜」のなかでは、明治百年には家庭のなかにはラジオやテレビもある、と書いている。

明治二十三年に若松賤子（一八六四～一八九六）の「小公子」が発表され、大きな人気を呼んだ。パーネットの小説のほん訳である。賤子は明治二十九年に肺を病み、三十歳の若さでなくなつたが、博文館から刊行された「小公子」は昭和五年までに四十二版を重ねた。ベストセラーの記録である。賤子は会津若松の武家に生まれ、戊辰戦争のなかで両親を失うという悲運に見舞われ、幼児のときアメリカ人家庭に引き取られ、横浜で育った女性である。

戊辰戦争で両親と妹を見失った人に天田愚庵（一八五四～一九〇四）がいる。両親を尋ねて全国を流浪し、山岡鉄舟の知遇を得て山本長五郎（清水次郎長）の養子となり、明治十七年に「東海遊俠伝」を書いている。のち清水次郎長の物語の基本となった台本である。しかし彼の本領はむしろ短歌と書であった。いわき平の出身。高山樗牛（一八七二～一九〇二）は明治の天才的な文芸評論家といわれた人物。生まれは山形県だが、少年時代は本県で過ごした。「滝口入道」などで文名を高めたが、三十一歳の若さで死んでいる。明治四十年前後には後藤宙外が中央から猪苗代湖畔に引退し、その地から「名倉山」を題名として短編集を出している。このころ大関記で知られる矢田挿雲が福島にいた。

外交官で詩人作家の柳沢健（一八八九～一九五三）は会津若松の出身。大正三年「川田主水の切腹」で文壇に認められた。大正六年に史劇「王争曲」を書いた郡虎彦は、会津落城に際して責を一身に負って自決した国家老萱野権兵衛は彼の養祖父である。近代劇開拓の功労者とされ、武者小路実篤、志賀直哉、里見弴らの編集で「郡虎彦全集」三巻が出ている。なお志賀直哉は相馬藩ゆかりの人物。直哉の祖父は藩の家老しており、明治二十五年の当主誠胤の死をめぐる「相馬事件」の中心人物だった。

久米正雄（一八九二～一九五二）は長野県上田に生まれたが、八歳のとき小学校校長であった父が校舍火災の責任をとって自殺したため、母の実家がある安積野に移り、少年時代を郡山で過ごした。

本県を題材にした作品が多い。

青踏社で活躍した作家に水野仙子（一八八八～一九一九）がいる。須賀川の商人の家に生まれたが、兄の服部駒治は歌人として知られ、妹の服部けさ子は救済事業に一生をささげた。仙子は「女子文壇」や「文章世界」に投稿していたが、田山花袋の激賞するところとなり、門下にはいり、のち青踏社に属し盛んに書いていた。しかし三十二歳で大正八年に世を去った。

宮本百合子（一八九八～一九五二）は本県出身ではないが、祖父中条政恒は明治政府の手による安積開拓の中心人物だった。百合子は東京に生まれたが、少女時代は夏になると祖父のひらいた安積開拓に遊びにきていた。当時の開拓者は貧しく、その姿を見聞して大正五年に誓った「貧しき人々の群」で一躍文壇に認められた。

芥川賞作家が三人。まず中山義秀（一九〇〇～一九六九）は明治二十三年県南の長沼出身。安積中を出て千葉県下で英語教師をしていたが、昭和十三年「厚物咲」で芥川賞を受け、その後文壇に活躍した。東野辺薫（一九〇二～一九六二）は安達の上川崎で行われている和紙づくりに取材した「和紙」で昭和十八年の芥川賞を受けた。その後文壇に出る機会をつかむことができず、福島で死去した。富沢有為男（一九〇二～一九七〇）は昭和十一年「地中海」で芥川賞をとり、第二次大戦中に浜通りの広野に疎開、晩年までここを動かず県文学賞の審査などをしていたが、東京に帰って死んだ。

四年後に福島を去っている。このほかにも福島には有名人がおとずれ、俳壇に大きな影響を与えている。

戦後の廃墟のなから、活字に飢えている人々にむさぼり読まれたものに「近代文学」がある。この同人に本県に關係のある人が多かった。荒正人、壇谷雄高、平田次三郎、島尾敏雄などである。プロレタリア文学では、斉藤利雄の「橋のある風景」がある。また変わり種には「二等兵物語」の梁取三義がいる。SF界の売れっ子星新一はいわき市出身の製薬王星一の長男である。

音楽・演劇

作曲家に古関裕而がいる。歌謡曲で彼の作曲になるものは約三千曲。「露営の歌」「長崎の鐘」など。福島に生まれ育った。また「涙の渡り鳥」「島の娘」を作曲した佐々木俊一は浪江の出身。このほか猪股公章、渡辺今朝蔵、湯浅譲二、辺見吉太郎などがおり、県内在住の作曲家も多い。評論では小高の天野秀延が「現代イタリア音楽」で第十一回芸術選奨を受賞している。このほか門馬直美、油井正一、竹内至、河野保雄、長谷川哲夫などが評論で活躍している。美しいうたごえで知られるFMC合唱団は昭和二十二年の結成。その指揮者高野広治は一貫して十六世紀イタリアの作曲家パレストリーナの作品を演奏、FMCのパレストリーナか、高野のパレ

劇作家の真船豊は猪苗代湖畔の出身。「寒鴉」「山鳩」「イタチ」など名作を書いている。また本県ゆかりの作家としては「歴史」の神山潤がいる。以上は小説・戯曲の作家で中央に名を知られた人だが、県内でじっくり文学にたずさわっている人々も少なくない。

自由詩について書くとすれば、やはり大正の中期からであろう。特徴的なものは大正十一年から十五年まで磐城の猪狩満直、吉野義也、三野混沌などの農民詩人グループが出していた「播種者」である。本県に初めて民衆詩派の種を植えたといえる。こうしたなかからカエルの詩で有名な草野心平が育っている。このあと高橋新二の「丘陵詩人」、さらに東北地方全体に同人をもつ「北方詩人」などが生まれ、県内の詩壇は順調に育った。このなかで県内に自由詩の種をいち早く植えたのは高橋である。

短歌では、万葉集にうたわれている本県關係の名歌がかなりある。古いことは別におくとして、明治以降ではアララギの古い会員並木秋人がいる。また斎藤茂吉と親交があった門馬春雄が福島におり、特異な歌風で知られた。また同じ時期に詩歌の同人佐藤喇叭花がおり、福島民友新聞の歌壇で多くの歌人を育てた。

俳句では日本派俳壇を福島に創設した富士崎放江（一八七四～没年不明）がいる。新潟県生まれだが、明治三十八年福島に移り住み、福島の俳壇に新風を送り込んだ。また先にあげた矢田掃雲も明治三十五年福島民友新聞に入社し、福島俳壇に大きな影響を残し、

ストリーナーかといわれるほど。FMCは毎年全日本合唱コンクールで好成績をあげ、アメリカ公演もすでに二回実施している。

歌手では「イヨマンテの夜」で知られる伊藤久男、「愛染かつら」などの霧島昇、「赤いランプの終列車」の春日八郎がいる。戦前のソプラノ界に知られた関屋敏子は二本松出身である。

演劇關係では特に目立つものはない。ラジオドラマからはいり、現在はテレビで活躍しているドラマ作家岩間芳樹がいる。このほか北上健、富田博之なども活躍中である。

美術

本県の近代画家をあげる場合は、やはり亜欧堂田善から始めなければならぬ。田善は須賀川の出身。司馬江漢と共に日本の銅版画の基礎を確立した。また谷文晁、僧白雲らと共に日本洋画の手法を植えつけ先駆者といえる。田善の生年ははっきりしないが、寛延元年とされる。生家は染屋



善 田 善
で、兄は崑山といつて家業を継ぎ、狩野派の絵を学び、日光廟の彩色御用の仕事をしていた。田善も絵を好み、分家したが本家も分家も絵に身を入れていたた

め本業は振るわなかった。このころ伊勢に月徳という画僧がおり、田善はこの月徳にあこがれ、その門下にはいつて絵の勉強を重ねた。寛政六年白河藩主の松平築翁が須賀川を訪ねたさい、田善の絵を見て感心し、召し出した。谷文晁と知ったのはこのときのことである。白河藩に仕えることになった田善は、寛政十一年から長崎におもむき、四年間洋画と銅版画の研究を重ね、同時に世界の事情を築翁に報告する隠密の役目もつとめた。田善は洋画、日本画などおびただしい作品があるが、銅版画を完成したのは六十歳を過ぎてからであり、その精力は万人にすぐれたものがある。

田善の門人に四人の画人がいる。田驥、田一、遠藤香村、新井令恭らである。なお白河藩主松平築翁が文化人であった関係で谷文晁が本県で活躍し、そのなから白河生まれの蒲生羅漢が出ている。初めは文晁につき、明末の画風を承継している。また同じ白河生まれの高久隆古は大和絵風の画人。高久霧屋の高久家を継いだ。このほか白河には佐竹永郎がいる。佐竹永海に師事、永海の二女をめぐって佐竹姓を名乗った。

谷文晁は「雪山楼」という大画塾の統領だった。現代でいえば院展よりもっと権威があったものである。白河藩主松平築翁は名を定信といい、三十歳で江戸幕府首席老中をつとめた人物。しかし政治的手腕よりも、文化人としての業績が多い。画家としてもすぐれた作品を残している。わが国最古の考古学の著作といわれる「集古十種」の編さんをしたが、この著作に谷文晁も協力させている。白

の名手として中国大陸で高く評価されている。

洋画では何といっても関根正二（一八九九—一九一九）である。

関根の名が一般に知られるようになったのは戦後のこと。昭和二十八年国立近代美術館が近代洋画の歩み展をひらいたとき、二十余人の作品が展示された。そのなかに関根も選ばれた。また昭和三十三年同美術館で異端の画家展が開催されて注目を集めたが、その関根も現在ではちょっとしたブームを呼んでいる。関根は白河の貧しい屋根職の家に生まれ、小学生のとき東京に移住、大正四年十七歳で



二科展に入選、大正七年には「信仰の悲しみ」「姉弟」で樗牛賞を受けた。そして翌八年二十一歳の若さで急逝している。文字どおり薄命の天才児であったが、その一生はあまりにも短く、

作品も少ない。しかし関根の画業は青木繁、古賀春江、万鉄五郎、小出栖重、岸田劉生、佐伯祐三、長谷川利行などと共に大きな存在となっている。代表作「信仰の悲しみ」は倉敷美術館、「子供」は東京プリジストン美術館、その他の作品はそれぞれたいせつに保存されている。

このほか水彩画の春日部たすく、洋画の吉井忠がいる。吉井は福島に生まれ、帝展や独立展に出品、滞欧をへて自由美術家協会、日

河地方にすぐれた画家がいたのはこの関係があったからである。

彌崎波響は北海道松前侯の実弟。文化四年エゾ地が幕府直轄になると、松前侯は本県の梁川に移され、九千石に封ぜられた。波響は円山応挙に師事し多くの仕事を残したが、その弟子に熊坂適山がいます。適山の門下では弟の蘭齋、菅原白竜などの名が知られている。

明治にはいつてからの画家では、勝田薫琴（一八七九—一九六三）が本県出身である。文展第一回から参加、帝展審査員橋本雅邦の門下であり、若いころインドの王族タゴールの招きでカルカッタ国立美術学校で東洋画を教えた。

湯田玉水（一八七九—一九二九）は最初川端玉章について四条円山派を学んだ。その後独学で南画を学び、独自の境地をひらいた。昭和二年帝展の「磐谷悠々」でいちおう画境を確立したが、昭和四年惜しまれて他界した。荻生天泉（一八八二—一九四五）は正統大和絵の画風を学び、昭和初期へそれを伝えた伝統派画人の数少ない一人である。太田秋民（一八八一—一九五〇）は天泉と並ぶ大和絵画家である。荒木寛歌の門に学び、大和絵調に浮世絵風筆画の要素をとり入れ、みずみずしい情趣が持ち味。帝展無鑑査、文展無鑑査だった。

坂内青嵐（一八八一—一九三四）は重厚な歴史画や人物画で知られる。日本画会正会員。昭和四年のバリ美術展に「山水」を出品したほか、帝展を舞台として「茶屋四郎二郎」「鎧屋の翁」「大近松」「伊井大老」「竹内式部」「上杉謙信」などがある。渡辺農歌は孔雀

本美術会に参加、主体美術の創立にあたった。糸園和三郎や寺田政明らと樹展を行うなど、堅実な地歩をみせている。さらに班目秀雄、山川忠義などが洋画界に活躍している。国際的に知られる版画の斉藤清も会津の出身。なお最近の洋画界では鈴木新夫、若松光一郎などが脚光をあびている。

日本画では院展で活躍した酒井三良（一八九七—一九六九）がいた。小川芋銭との交遊が深く、自然派の詩人的要素が強い。同じく院展で活躍した須田瑛中の名も忘れられない。角田馨谷、石塚省三、木下春なども日本画で名をなしたが、いまはすでにない。現在の第一線には芸術院賞を受けた日展の大山忠作、院展同人の常盤大空がいる。大空は院展の中堅作家として思想的な深さのある作風をみせている。ほかに酒井白澄、中野蒼駕らがいる。

彫塑では何といっても佐藤玄々（朝山）（一八八八—一九六三）の名をあげなければならない。明治二十一年相馬に生まれ、山崎朝雲に師事、大正三年三十七歳で再興美術院第一回展に入選、昭和十一年第一回帝展に参加、翌十二年帝国美術院会員となった。東京日本橋の三越にある「天女」はその代表的な大作とされる。玄々と並んで日展系に三木宗策がいる。木彫界に名をなした高村光雲門の山本端雲に学んだ。また橋本朝秀は芸術院賞をとっている。

このほか日展の評議員、審査員クラスに橋本高昇、大田良平、赤堀信平、佐藤静司、三坂耿一郎など。本県は彫塑界花盛りといった状況にあり、有望作家が目白押しである。

工 芸

古い伝統をもつ会津漆器は、多くの職人の手に支えられて発展してきた。その古い時代は別として、大正から昭和の会津蒔絵まきゑの手法を確立したのは津田憲二（得氏）（一八八九～一九五五）である。津田は会津工業高校を卒業したあと、東京美校の白山松哉について蒔絵を学び、後輩の指導にあたった。

県内では陶芸も盛んである。会津本郷焼、相馬駒焼、二本松万古焼など、古くからのものを数えたらかなり多い。本郷焼は昭和二十九年、粗物の宗像豊意（一九二二～一九七〇）が制作したニシン鉢がバーナード・リーチ、浜田庄司らに認められ、昭和三十三年ブリュッセル世界博でグランプリを獲得した。いろいろ本郷焼は民芸調陶器として脚光をあびた。現在は長男の宗像亮一が民芸陶器に生命をかけている。大竹五郎、佐竹富三の茶碗や壺などは一級品である。滝田項一は芸術的陶芸で白磁の味を生かし、新進陶芸家として売りに出している。

古い三春人形、伝統こけしのこと、土着のさまざまなものがあるが、ここでは割愛したい。

おわりに

大急ぎで文化人脈をあげてみた。こうしてみると、どうやら本県の特徴といったものが埋没して見いだせなくなる。それは本県ばかりでなく、どの県も同じだろうと思われる。もちろん作爲的に修辭して摘出した場合は、いちおうの特徴をあげることができようであらう。

そこへいくと、古代ははっきりした特徴をつかむことができるようである。万葉集のなかに本県の地名をよんだ歌は、安積山一首、会津嶺一首、安達多良三首、真野萱原一首、可刀利一首がある。歌の数からいえば、それほど多いとはいえないが、みちのくのなかでは多いほうである。大和の人々からみればエキゾチックなあのがれの地であり、夢の地であって名歌が多い。

安積山影さへ見ゆる山の井の浅き心を吾が思はなくに
みちのくの真野の萱原遠けども面影にして見ゆといふものを
防人の歌にも美しい名歌がある。

会津嶺の国をさ遠み逢はなはば徳びにせもと紐結さね
筑紫なる匂ふ児ゆえに陸奥のかとりおとめの結びし紐とく
そして天正の末年、豊臣秀吉から会津に封ぜられた蒲生氏郷は、利休七哲のひとりといわれた人物。利休自刃後その子千少庵は会津に逃れ、以後日本茶道の本流は一時本県の会津に移るのである。このような特徴をさぐることができるのは、かつて本県が置かれた地理的特殊性によるものだろう。現在は高速道路が走り、東北新幹線も遠からず開通となる。いままでは通過廊下のような役割をしていた線の本県も、やがて関東の面の中にその特質は埋没することであらう。

（作家・元福島県史編纂室長）